



人権イメージキャラクター  
人KENまもる君

令和7年度 全国中学生

# 人権作文 コンテスト

東京都大会 入賞作品集



人権イメージ  
キャラクター  
人KENあゆみちゃん

東京法務局 東京都人権擁護委員連合会

令和7年度 全国中学生人権作文コンテスト 東京都大会 入賞作品集

## 人権相談はこちらへ

相談は、人権擁護委員又は法務局職員がお受けします。

人権についての全般的な相談はこちら  
**みんなの人権110番**

(全国共通)

ゼロゼロみんなのひやくとおぼん

**0570-003-110**

差別や虐待、パワーハラスメントなど、様々な人権問題についての相談電話です。  
電話は、おかけになった場所の最寄りの法務局・地方法務局につながります。

**常設相談所**

- ◎ 東京法務局人権擁護部
- ◎ 東京法務局府中支局
- ◎ 同 八王子支局
- ◎ 同 西多摩支局

子どもに関する相談はこちら  
**こどもの人権110番**

(全国共通・通話料無料)

ゼロゼロみんなのひやくとおぼん

**0120-007-110**

学校でのいじめ、虐待など、子どもの人権問題に関する専用相談電話です。

【相談時間】月曜日～金曜日(休日を除く)の午前8時30分～午後5時15分

LINEじんけん相談 LINEでも相談を受け付けているよ



@snsjinkensoudan

検索



こちらから友だち追加してください▶

インターネット人権相談 子どもの人権 **SOS-eメール**

インターネット人権相談

検索

<https://www.jinken.go.jp/>



外国語による人権相談

東京法務局人権擁護部

**0570-090911**

英語・中国語・韓国語・フィリピン語・ポルトガル語・ベトナム語  
ネパール語・スペイン語・インドネシア語・タイ語

【相談時間】

平日午前9時～午後5時

東京法務局 東京都人権擁護委員連合会

## はしがき

東京法務局と東京都人権擁護委員連合会は、次代を担う多くの中学生に人権問題に関する作文を書くことを通じ、互いの人権を尊重することの大切さについて理解を深め、豊かな人権感覚を身に付けてもらうことを目的として、昭和四七年度から、都内の中学生を対象とした人権作文コンテストを実施してまいりました。また、昭和五六年度からは、法務省及び全国人権擁護委員連合会が主催する「全国中学生人権作文コンテスト」が実施されることとなり、毎年、数多くの作品が寄せられています。

本年度においても、東京新聞、東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、公益財団法人人権擁護協力会、全日本空輸株式会社、日本航空株式会社、日本空港ビルディング株式会社、株式会社パイインターナショナルの後援をいただいて東京都大会を実施しましたところ、都内二八四校の中学校から、三万三、七二〇編に上る作品が寄せられました。

本作品集では、入賞作文三十六編を紹介させていただきました。いずれも中学生らしい純粋な感覚で人権課題をとらえた作品です。より多くの方々にお読みいただき、人権尊重思想の普及高揚が図られることを願っております。

終わりに、本年度の東京都大会実施に当たり、熱意をもって応募された中学生の皆さんを始め、多大な御理解と御協力を賜りました各中学校、東京新聞、東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、公益財団法人人権擁護協力会、全日本空輸株式会社、日本航空株式会社、日本空港ビルディング株式会社、株式会社パイインターナショナル、東京都教育庁、各区市町村教育委員会、各区市町村人権擁護事務担当者の皆様方、厚く御礼申し上げます。

令和八年一月

東京法務局  
東京都人権擁護委員連合会

## 目次

## 〔入賞作品〕

## 最優秀賞（東京法務局長賞）

その人らしく……………府中市立府中第三中学校 二年 川上和奏……………4

## 最優秀賞（東京都人権擁護委員連合会会長賞）

勇気が生んだ「声」……………昭島市立瑞雲中学校 二年 中村希愛……………6

## 最優秀賞（東京新聞賞）

声をかけること、声をあげること……………府中市立府中第一中学校 二年 皆木涼……………8

## 特別優秀賞（東京都教育委員会賞）

「外国人お断り」って、なんで？……………中央区立日本橋中学校 二年 宋子鑿……………10

## 特別優秀賞（一般財団法人東京私立中学高等学校協会賞）

82億個の風船……………学習院女子中等科 三年 藤井しおり……………12

## 特別優秀賞（全日本空輸株式会社賞）

家族と暮らすのはあたり前じゃない……………東大和市立第五中学校 二年 八代空希……………14

## 特別優秀賞（日本航空株式会社賞）

妹が教えてくれたこと……………府中市立府中第六中学校 一年 井上鉄心……………16

## 特別優秀賞（日本空港ビルデング株式会社賞）

私の兄のこと……………練馬区立石神井中学校 二年 前川さや……………18

## 優秀賞

偏見と不平等がない世の中へ……………荒川区立第四中学校 二年 竹内柚希……………20

奨 励 賞

|                  |                  |    |               |    |
|------------------|------------------|----|---------------|----|
| 知ってほしい自分のこと      | 日野市立日野第四中学校      | 二年 | 萩生田 彩音        | 22 |
| 私がそばにいる          | 日野市立日野第四中学校      | 二年 | (非公表)         | 24 |
| 自分らしさを信じて        | 西東京市立明保中学校       | 一年 | 栗本 莉典         | 26 |
| 私と、もう一人の「人間」     | 東海大学菅生高等学校中等部    | 三年 | 山崎            | 28 |
| 『いつかきつと』         | 東京学芸大学附属竹早中学校    | 一年 | 白土 治子         | 30 |
| いじめについて          | 品川区立浜川中学校        | 七年 | 芦澤 汰剣         | 32 |
| 戦争と人権            | 大田区立大森第十中学校      | 三年 | 川上 日奈多        | 34 |
| わたしたちの未来         | 城西大学附属城西中学校      | 三年 | 高橋 さくら        | 36 |
| ささやかな決意          | 葛飾区立本田中学校        | 三年 | 相川 ズルゲルガル スベテ | 38 |
| 見えない壁            | 江戸川区立松江第六中学校     | 三年 | 相川 紬          | 40 |
| 理解すること、関わること     | 八丈町立大賀郷中学校       | 三年 | 佐藤 花          | 42 |
| 言葉の力と甲子園         | 小笠原村立小笠原中学校      | 一年 | 宇野 玲          | 44 |
| 障害者の偏見           | 町田市立山崎中学校        | 一年 | 小川 希那         | 46 |
| ちがいのなかにある大切なこと   | 町田市立鶴川中学校        | 三年 | 金邊 彩希         | 48 |
| 差別に負けない心         | 町田市立鶴川第二中学校      | 三年 | 外所 凛太郎        | 50 |
| 見えない障害と生きる       | 町田市立堺中学校         | 二年 | 山本 彩紗         | 52 |
| 自分事として           | 八王子市立浅川中学校       | 二年 | 綾香 羽生         | 54 |
| 自慢の父             | 国分寺市立第四中学校       | 三年 | 竹内 流          | 56 |
| 声なき声を            | 国立市立国立第一中学校      | 二年 | 岡本 美咲         | 58 |
| 知る・学ぶことでほどける偏見の糸 | 武蔵野市立第二中学校       | 二年 | (非公表)         | 60 |
| 私の特性と人権          | にしみたか学園三鷹市立第二中学校 | 一年 | 臧佳 純          | 62 |
| 水族館が教えてくれたこと     | 鷹南学園三鷹市立第五中学校    | 二年 | 臧佳 純          | 64 |
| 「人権保育」について       | 調布市立第三中学校        | 二年 | 黒沼 稟          | 66 |
| 祖母と私と人権          | 東久留米市立東中学校       | 三年 | 南野 陽          | 68 |
| 身近にあって気づかないもの    | 府中市立府中第一中学校      | 二年 | 村野 咲          | 70 |
| 自分らしく生きられる社会に    | 福生市立福生第一中学校      | 二年 | 原島 旭          | 72 |
| 兄の道              | 檜原村立檜原中学校        | 一年 | 青柳 幸          | 74 |

## 最優秀賞

(東京法務局長賞)

### その人らしく

府中市立府中第三中学校 二年

川上 和奏

私が人権について考えるきっかけになったのは、今年の四月に亡くなった祖父との出来事です。祖父はとても優しく、いつも家族や身近な人を大切にする人でした。亡くなる前にも家族一人ひとりに手紙を書いてくれました。その手紙には感謝の言葉や励ましがつづらられていて、読むたびに胸が温かくなるものでした。

祖父が病氣だと知った時、私はその場にいなかったのですが、詳しい経緯は分かりません。ただ、病氣は癌であり、治療をどうするか家族が何度も話し合っていたことを聞きました。抗癌剤を使うべきか、入院を続けるべきか。それとも、本人が望む形で残りの時間を過ごすのか。

そんな中、祖父は「最期は家に帰りたい」と言っていました。病院で治療を受ければ少しは長生きできる可能性があったかもしれませんが、それでも、祖父は病院では

なく、自分の家で、自分らしく過ごすことを選びました。

その希望を聞いたとき、家族は迷いもなかったと思います。家に帰れば、病院ほどの医療設備はなく、介護や看病の負担も増えます。それでも、父と父の兄弟たちは、「お父さんがそうしたいなら」と言って、その願いを受け入れました。私は、そのことをとてもすごいと思いました。なぜなら、病氣の人の希望をかなえることは、簡単なようで、実はとても勇氣のいることだと思うからです。

自宅療養が始まってから、祖父との時間は以前より穏やかになったように感じました。一緒にご飯を食べたり、部屋でゆっくり話をしたりしました。病院の白い壁や機械の音ではなく、慣れ親しんだ家の中で、家族の声や笑い声に囲まれて過ごす日々。それは、祖父にとって何より安心できる時間だったのではないかと思います。

祖父が亡くなる十日前、祖父の希望で祖父が私達に向けて書いてくれた手紙を一人ひとりが読み上げる生前葬をしました。私が手紙を読む番になった時、私はその手紙を見て胸の奥がじんわりと温かくなり、同時に涙がこみ上げました。その瞬間、これまでの祖父との思い出がよみがえり、「祖父は、私のことをこんなにちゃんと見ていてくれたんだな」と感じました。そして手紙には

「君の微笑みは素敵でこれからも大切にしておいてほしい」という言葉も書かれていました。祖父にそう思ってもらえていたことが私は、何より嬉しかったです。これからも、この笑顔を大切にしていこう、そして祖父に見せられるような笑顔でいたいと強く思いました。

私は会いに行くたびに、祖父が穏やかな笑顔をみせてくれることが嬉しかったです。病気でつらいはずなのに、「来てくれてありがとう」と言ってくれる姿を見て、私も自然と笑顔になりました。その姿は、まさに自分らしく生きるということだと私は思いました。

この出来事を通して、私は人が生きていく上で欠かせないものは、単に「長く生きること」だけではないと気づきました。その人が「どう生きたいか」、そして「どこで、誰と過ごしたいか」という希望を大切にすることが、人生を豊かにするのだと思いました。

人権という言葉を書き引くと、「人が人らしく生きるための権利」と書かれています。その中には「自己決定権」というものがあります。これは、自分の人生に関わる重要なことを自分で決める権利のことです。祖父が「最期は家で過ごしたい」と選んだのも、この自己決定権にあたります。そして、それを周りの家族が尊重したことは、人権を守る行動そのものだと感じました。

もし家族が、祖父の気持ちを聞かずに病院での治療を

続けていたら、祖父は不安や寂しさを抱えながら過ごしていたかもしれせん。しかし、家族は祖父の声に耳を傾け、否定することなく受け入れました。その姿を見て、私は「人権を守ることは、特別なことはなく、身近な人の気持ちを大切にすることから始まるのだと知りました。

祖父との別れはとても悲しかったです。でも、のとき家族が願いを尊重したことで、祖父は幸せな時間を過ごせたと思っています。そして、その経験は私にとって、一生忘れられない大切な学びになりました。

これから私は、人と接するとき、その人の気持ちや希望をできるだけ尊重したいと思っています。それは友達や家族だけでなく、学校や将来の仕事でも同じです。相手の立場や考えを理解しようとするのが、相手の人権を尊重することにもつながると思ったからです。

祖父が教えてくれた「自分らしく生きることの大切さ」。その思いを胸に、私はこれからも周りの人と向き合っていきたいと思っています。

## 最優秀賞

(東京都人権擁護委員会連合会会長賞)

### 勇気が生んだ「声」

昭島市立瑞雲中学校 二年

中村 希愛

「お前の国は手で物を食べるんだろ！なら今日の給食も手で食ってみるよ！」

小学生の時、外国からの転入生に対して冗談交じりでごんなことを言った男子がいた。言われたその子は縮こまり、その日一口も給食を食べなかつた。そんなことは目にも止めず話題はすぐに変わり、みんな楽しそうに笑い美味しそうに給食を食べる。その子を除いて。私はその子の様子を気にしながらも結局、声をかけてあげる事ができなかつた。

そして昼休み、その子の席に人だかりができていた。その子と仲良くなりたかつた私は、その機に乗じてその子の席に向かつた。しかし戻つた。なぜなら、聞こえてきたのは、その子の国のことを侮辱するような意地悪な声たちだつたからだ。衝撃だつた。気が弱い私は、もちろんその子を庇うことなんてできず逃げた。本当は言い返してやりたかつたのに。

その日のことをなぜか泣きながら姉に相談した記憶がある。姉は真剣に聞いてくれて、

「その子のためにも間違つてるよつてちゃんと分かるように教えてあげな。」

と、いったアドバイスを私にくれたことを覚えている。

次の日、勇気を振り絞つてその子に学校探検をしようとして誘つて話すことができた。話してみるとこの前の暗い顔なんて考えられないくらいよく笑う明るい子だつた。おまけに話も面白くてわたしはこの子がすぐに大好きになつた。会話の中でその子はこんなことを言つていた。

「確かに私の国では手で物を食べるときがある。でもスプーンやフォークだつて同じくらい使う。日本人もお寿司やパンを手で食べるでしょ。手で食べることはおかしいの？」

と。私は確かになと共感した。日本が独自の文化をもつように外国も一つ一つ違う文化や習慣をもつている。外国の人から見たら、日本特有の習慣を疑問に思う人もいるだろう。

そして給食、今日も変わらず、あの男子は手で食べる馬鹿にしている。決まつて先生がいない時に。そしてそれに乗つかつている人もいる。今日こそはちゃんと間違つてると教えないと、席を立とうとしたら、教室のドアが開き給食室のおばさんが担任の先生と共に入ってきた。そしていつものニコニコした優しい表情で、

「食べ方は、国、地域、人などで違います。マナーだつて違います。それぞれのマナーを守つた食べ方であれば全部正しいんです。自分の食べ方の常識を無理に押し付けてはいけません。みんな楽しく食べるには、習慣の違いも含め、認め、尊重する必要があります。」  
というようなことを分かりやすく丁寧に教えてくれた。さつきまで馬鹿にしていた男子はその後は何も言わなかった。

しかし、事件は起きた。五時間目か六時間目の総合で、工作に使う画用紙を選ぶ時にさつきとは別の人が、「ここは日本だし日本人が先に選ぶ権利があるんだから、外国人が一番最後ね。」

という差別的な発言が聞こえた。その意見に一部の人が乗り出して、その子は「選びたくても選べない環境」が作られてしまった。もう、あの時見せてくれた笑顔はどこにもなかった。ただ、俯いて涙をこらえていた。当時の私には、「人権」という認識はなかったけれど、みんなが言っていることがおかしいということだけは分かった。だから、さつきの給食で勇気をもらつた私は、でっかい声で

「国は違うけど同じ人間でしょ。選ぶ権利はみんなもつてるよ！」  
と叫んだ。気弱だった私のためにここまで声をあげたのは初めてで自分でもすごく驚いたことを今でも覚えて

ている。その子は、涙を流して、「ありがとう、ありがとう。」

と繰り返して、私も鼻がツンとした。そうしたら、あの男子も含めてなぜかみんな泣き出してごめんね、ごめんね、と謝った。思いがけないみんなの行動に驚きながらも、言つて良かったと思つた。あの子が涙を流して初めてみんなは発言の間違いに気づいた。その後は仲良く工作をし、あの子も含めみんなたくさん笑つた。クラスはやつと繋がつた。

国は違つても、私達は同じ人間だ。一人ひとりに個性があるように、一つ一つの国に一つ一つの文化、生活習慣がある。自分の国の価値観を他国の人に押し付けることは時に人を傷つける。違いを理解し、認めない限り、誰かが傷つく。でも誰か一人でも理解し認めることができる。決して集団でいじめてはならない。いじめや差別はその人の人権を侵害するから。自分の習慣と違つていても最初から否定せず尊重するのだ。その先に、国という垣根を越えて初めて人はつながり合える。私とあの子がそうして「親友」になつたように。これから先も、私は差別や偏見を壊すために声を出し続ける。今の私には「勇気」があるから。

## 最優秀賞

(東京新聞賞)

### 声をかけること、声をあげること

府中市立府中第一中学校 二年

皆木 涼

駅の近くの階段の途中で、一人の男性が立ち止まっているのを見かけた。多くの人が彼を避けるようにして通り過ぎる。なぜ立ち止まっているのだろう、人が多いのに危ないなと思いついて見ていると、私と一緒にいた母が男性に近寄って行って声をかけた。

「どこに行きますか？私にお手伝いできますか？」

「駅に行きたいんだけど、どっちに行ったらいいかわからなくなっちゃって。」

男性は声をかけられたことにほっとしたように答えた。そのとき、男性が白杖を持っていることに、私はやっと気がついた。

駅は目の前なのに、それが見えないということの大変さ、不安さに、私ははっとした。

「一緒に行きましょう。」

と母が言うと、男性は母の肩に手を置いて、白杖を使い

ながらゆっくり歩き始めた。駅に向かう途中、男性が言った。

「ご家族と一緒に来ているの？急いでいるだろうに、すみませんね。」

「娘と遊びに来ただけだから、時間もあるし大丈夫ですよ。」

と母が笑うと、男性は私とは違う方向に顔を向けて、

「お嬢ちゃん、せっかく遊びに来たのに、時間を取らせてごめんね。手伝わせちゃってごめんね。」

と何度も謝るのだ。私は驚いてしまって、

「いいえ。」

と小さな声で返すのがやっとだった。

そのとき、私は、この男性は今まで生きてきた中で、こうして何度も「ごめんね」「すみませんね」と謝りながら、人に助けを求めてきたのではないかと思った。誰かに何かを頼むたびに、謝らなければならぬのだろうか。困っているのは彼の方なのに、申し訳ないとふるまわなければならぬのだろうか。そんなことを思いながら、私は複雑な気持ちになった。

「この辺りはいつも混んでいるし、道が入り組んでいるから難しいんだ。」

点字ブロックの上をゆっくり歩きながら、男性が言った。私は少しでもできることをしたいと思ひ、二人の前

を歩いて駅員さんの所に行き、男性の存在と行き先を伝えた。ありがとうね、と男性と駅員さんに言われ、胸の奥がぎゅっと詰まったような気持ちになった。私が何か特別なことをしたわけでもないけれど、なにかちゃんと向き合えたような、背筋がのびたような気がした。すれちがっていく人たちの視線が、なんとなく珍しそうに私たちを見ているのを感じた。

困っている人には声をかけましょう。小さいころから教わってきたそのことは、道徳の授業で習うような正解は、すごく簡単なことのように思うけれど、実際の生活の中では誰が困っているのかも分かりにくくて、気付きにくい。周りにいる誰か他の人が行動してくれるのではないか、自分にできるかわからないし、声をかけていいのか迷って、実際に行動することのためにためらいもある。

けれど、私は「手伝いましょうか」と声をかける勇氣よりも、「手伝ってほしい」と声をあげることのほうが、もっと難しいのではないかということに気付いた。見えないことやできないことを人に伝えることは、とても勇氣がいる。助けてほしい、手伝ってほしいと言ったときに、断られたらどうしよう。迷惑だと思われたらどうしよう。そんな不安を抱えながら、誰かに助けを求めるといふのは、私が思っていた以上に大変なことなのだ。

だからこそ、私たちの社会は自然に手が差し伸べられ

る場所であってほしいと思う。今回のことで、声をかけるといふ小さな行動が、相手の不安や心配を和らげることがあるのだと学んだ。これからは、相手の立場を想像して、気付いたときには手を差し伸べられるようになりたい。人との間にある不安や遠慮を少しづつほいでいけるような関わり方をしていきたい。手伝ってと言いやすい空気や、ありがとうと言ひ合える関係を周りの人と一緒につくっていかれたらと思う。

誰かの手助けを必要としている人が安心して声をあげられる社会をつくるためには、まず私たちひとりひとりが見ようとすること、想像しようとすることが大切なのではないだろうか。ひとりひとりの小さな声かけや気付きが、みんなが安心して生きていける環境を一緒につくっていくことにつながるのだと思う。



## 特別優秀賞

(東京都教育委員会賞)

### 「外国人お断り」って、なんで？

中央区立日本橋中学校 二年

宋<sup>そう</sup>子<sup>し</sup>鑿<sup>ぞく</sup>

日本に来てもう何年もたち、日本語もある程度話せるようになりました。友だちもできて、学校生活は楽しいです。

ある時「外国人であること」が大きな壁になることがあります。私の家族が引っ越しを考えていた時のことです。家族と一緒に、ウェブで賃貸の物件を探していました。とても条件のいいマンションが見つかって、駅からも近く、家賃も手ごろで、「ここがいいな」と思っていました。でも、その物件には、はっきりと「外国人不可」と書いてありました。それを見た時、私はとてもショックでした。日本語も話せるし、ちゃんとルールも守れるのに、外国人だから住めないのと疑問に思っていました。実はそれだけではありません。他にも、たくさんの物件が「外国人不可」と書いてありました。

日本はすごくきれいで、みんな礼儀正しい国なのに、

「外国人不可」の言葉を見るたびに、「私はこの国では、まだ『外の人』なんだ」と感じてしまいます。

もちろん、オーナーさんや不動産会社の人は言葉の問題や、文化の違いを心配しているかもしれないし、きちんと暮らしている人たちもたくさんいます。ほとんどの人は、ゴミの分別もルールも守って暮らしています。「外国人」というだけで最初から信じてもらえないのは、とてもつらいことです。もし「日本人お断り」と書かれた部屋があったら、きっと誰でも「え？なんで？」と思うはずです。でも、私たちは「外国人お断り」という言葉を目にしても、それに反論することさえ難しいことが多いのです。

学校では、「人権」について学びました。すべての人は平等で、国籍などで差別してはいけないと教わりました。でも、現実にはそうではないこともたくさんあります。差別は、大きな声では言われなくてもたくさんあります。目に見えない形で存在しているのだと、私はこの体験を通して実感しました。

「外国人だから」という理由で壁があるから、いろんなことが実現できないことに悲しんでいます。外国人であることが悪いことではないので、「ちがう」ことを受け入れてもらえる社会であってほしいと心から思いま

す。

私の周りには、同じように悩んでいる外国人の友達もいます。言葉の壁や文化のちがいで苦しんでいる子もいます。でも、みんな日本が好きで、この国の一員になりたいと願っています。ただ、「外国人」というだけで線を引かれてしまう現実があります。

たくさんの方がこれからも日本で生きていきます。だからこそ、「外国人不可」という言葉に対して、みんなが平等に暮らせるようにしたいです。国籍ではなく、人として見てもらえる社会になるように、私は自分の体験を伝えていきたいと思います。

では、どうすれば「外国人お断り」という現実を変えていけるのでしょうか。私は二つの大きな方向があると思います。一つは「誤解を減らすこと」、もう一つは「お互いを知ること」です。オーナーさんや不動産会社の人が外国人を断る大きな理由の一つは、「もし日本語が通じなかつたらどうしよう」という不安だと聞きました。ゴミの出し方や近所付き合いのマナーを理解してもらえないのではないかと、という心配もあるそうです。でも、実際には日本語を学んでいる外国人も多いし、必要なら翻訳アプリを使うこともできます。「言葉の壁」はたしかに存在しますが、それを理由に最初から門を閉ざしてしまえば、歩み寄るチャンスさえなくなってしまう

ます。

もう一つの理由は「文化の違い」です。夜遅くまで大きな声で話す人もいるのではないかと、音楽を大音量で流すのではないかと心配する人もいます。でも、これは本当に「外国人だから」という理由でしょうか。実際には、日本人の中にもルールを守らない人はいますし、逆にとても静かに暮らしている外国人もたくさんいます。「外国人」問題を起こす人」という思い込みが、現実よりも先に結論を決めてしまっているように感じます。

私が願うのは、「外国人だからすぐにダメ」と言うのではなく、「一人の人間として、きちんと話をして決めてもらう」という当たり前の対応です。最初から拒否するのはなく、会って話してみても、「この人なら大丈夫だ」と信じてもらえる社会になってほしいのです。

世界の国々から人が集まる時代になり、日本にもこれから多様な人々が暮らすようになるでしょう。多様性は不安の種ではなく、社会を豊かにする力です。違いを恐れるよりも、違いから学び、受け入れることが未来を明るくすると私は信じています。「外国人お断り」という言葉がなくなつたとき、本当の意味で日本は国際的な社会になるのだと思います。そのとき初めて、私たち「外の人」ではなく、「この国の一員」として胸を張って生きられるのだと思います。

## 特別優秀賞

（一般財団法人東京私立中学高等学校協会賞）

### 82億個の風船

学習院女子中等科 三年

藤井 しおり

人権という言葉は、生活する中でよく耳にする。ニュース、教科書、映画、小説、身の回りのあらゆるところで人権の重要性は主張されている。私は中学受験をしたとき、日本国憲法の三大原則を何度も問われたので、反射的に「キホンテキジンケンノソンチョー」と言えるようにもなった。しかし、人権が実際の生活で、どんな風に機能しているのかを意識したことはあまりなかった。

小学校のときの担任の先生の話で、今でも思い出す、人権に関する心に残ったものがある。

箱の中に空気の入った風船を入れるとする。風船が一つなら余裕を持って入れることができるが、二つ、三つと増やしていくと少し箱がきつくなってくる。そうなる、風船はぶつかり合った部分がお互いに少しずつ凹んで、箱の中に収まる。同じように、人権というのは、時

にぶつかり合ってしまうことがある。人が一人なら、人権はその一人だけのためにあるから、何をしたらいい。でも、実際の社会の箱には、たくさんの人が入っている。その大勢が自分の人権だけを主張したら、風船は破裂してしまう。だから、社会というのはお互いの人権がぶつかり合った時、同じだけ凹み合うことで成り立っているのだ。

私は当時、この話を聞いてとても納得した。のちに基本的人権は無制限ではなく、公共の福祉に反しない限りで認められているということも知った。しかし、今改めて考えると、自分だけが膨らもうとする風船もいるのではないかとも思ってしまった。

SNSを見ていると、アンチコメントやヘイトスピーチを見かけることがある。ある投稿で、「外国人は国へ帰れ」という言葉を見かけたとき、私は強い憤りと疑問、違和感を感じた。人種や性別、宗教への偏見を書き込んだり、理不尽な怒りをぶついたりすることが、誰でも見ることができるとSNSで行われているのは普通に考えたらありえないことだ。しかし、ヘイトスピーチを規制することは表現の自由を侵している、という意見もある。表現の自由とは、思想や意見を自由に外部へ表現し、伝えることができるという人権の一種だ。日本国憲法ができる前、戦時中は言論弾圧が行われていたが、民

主義国家となった今、この表現の自由は認められている。しかし、ヘイトスピーチは果たしてこの表現の自由に当てはまるのだろうか。ヘイトスピーチによって他者の尊厳を傷つけたりすることは、自分勝手に膨らもうとする風船になってしまっているのではないか。

また、表現の自由と密接に関わる、知る権利という人権がある。これは、文字通り情報を知ることができるといえる。この権利を保障するために国や自治体には情報を公開する義務がある。しかし、芸能人がプライバシーを週刊誌などに公開されてしまうのは、プライバシー権を侵害しているのではないか。また、災害発生時、人命救助のために被災者名簿を公開することがあるが、被災者の個人情報保護の観点から、むやみに公開すべきではないというジレンマもある。このように、相反する人権も存在していて、それぞれ譲り合ってバランスをとらなければならないのだ。

今、中学三年生になって、基本的人権の尊重とは、国が保障しているものであると同時に、私たち一人一人がお互いに凹み合うことだと理解した。個人が尊重される社会を作るのは国家ではなく、私たち国民なのだ。

風船には、さまざまな色や柄、大きいものや小さいものがあるように、それぞれ人には個性がある。大きい風船が小さい風船を押しつぶしたり、色や柄で差別される

ことがあつてはならない。私はこれから、自分の発言や行動によって傷つく人がいないか、偏見はないか、意識しようと思う。私が見ている風船の面はほんの一部で、他の角度から見たらまた違う柄が見えることもあるかもしれないし、風船の中身にも私の知らない部分があるかもしれない。一方向からだけ見て、人を判断することはしたくない。また、誰かが差別を受けているとき、私はただ黙って見ていただけの人間ではありたくない。声を上げることはとても勇気がいる。でも、間違っていると感じたら、違うと言える勇気を持ちたい。人権を「守ってもらおうもの」ではなく「守るもの」として捉え、自分なりにできることを実践していきたいと思う。

基本的人権とは、国が与えてくれるものではなく、私たちが他者と共に生きるために意識し、お互いに守り合うべきものだ。他者の人権を尊重することが、自分の人権を守ることにもつながる。私たちの暮らす地球には、約82億人もの人がいる。この形も色も違うたくさんの風船たちが、ぶつかり合いながらも、その度に凹み合って暮らせる箱が実現するのを願っている。

## 特別優秀賞

(全日本空輸株式会社賞)

### 家族と暮らすのはあたり前じゃない

東大和市立第五中学校 二年

八代空希

私は今、児童養護施設で生活しています。家族とは一緒に暮らしていません。初めて施設に来たときは、不安とさみしさでいっぱいでした。知らない場所で、知らない人たちと暮らすことが、こんなに怖いとは思いませんでした。どうして自分だけがこんな目にあうのか、何度も考えて、なぜか自分がいやになり涙が出る日もありました。

でも、施設の職員さんや友達が少しずつ私に声をかけてくれて、少しずつ心が落ちついていきました。ここでは、たくさんの子供達が、それぞれの理由で家族と離れて暮らしています。中には、つらい過去をもっている子もいます。でも、みんなと同じように、笑ったり、泣いたり、未来に向かって生きています。

施設で暮らしているというだけで、周りから「かわいそう」と思われることがあります。でも、私はかわいそ

うな存在ではありません。私は、自分の人生を一生懸命生きていく、ひとりの人間です。家族と離れて暮らすことは悲しいことかもしれませんが、それだけで私の価値が決まるわけではありません。

私は今、学校に通って、友達と話して、勉強や部活動にもがんばっています。施設の生活も、自分の大事な毎日です。もちろん、家族と暮らせたらかよかったと思うこともあります。でも、今の私にも、支えてくれる人たちがいて、自分の居場所があります。それはとてもありがたいことだと思っています。

これからも、自分の道を前向きに歩いていきたいです。そして、大人になったときには、施設で過ごした経験を生かして、同じような思いをしている子供達に寄り添える人になりたいです。私にとって「人権」とは、「どんな環境に生まれても、自分らしく普通に生きていく」ということです。

施設での生活には、楽しいことだけではなく、大変なこともあります。行事や外出などの楽しみもある一方で、門限やルールが多く、自分の自由にできないこともあります。また、「どうして家に帰れないの?」と聞かれたときに、どう答えればいいか悩むこともあります。本当の気持ちを伝えず、笑ってごまかすときもあります。そういうとき、自分が周りとは少しだけ違う世界にい



## 特別優秀賞

(日本航空株式会社賞)

### 妹が教えてくれたこと

府中市立府中第六中学校 一年

井上 鉄心

「障がいを持っている方には親切にしなければいけません。」困っている人は助けてあげましょう。」

いつ誰に教えてもらったかは思い出せない。もしかするといつの間にか刷り込まれた「常識」なのかもしれない。頭では分かっているのに、どこか外国のニュースを聞いているような自分とは遠い世界の話のように思っていた。

僕には五歳年下の妹がいる。今まで一度もケンカなんてしたことがなく、一緒にゲームをして遊んだりもする。自分で言うのもちよっと恥ずかしいが、とても仲がいいと思う。なんと言っても妹の名付け親、いや名付け兄は僕だ。とてもかわいく自慢の妹だ。

ある日僕は、妹の事で話があると両親に呼ばれた。ちよつと妹が一年生になる直前で、僕と同じ小学校に通うので「よろしくね。」とか言われるんだらうなと思

ながら軽い足取りでリビングに行く、僕が想像もしていなかった真剣な表情の両親がいた。両親は僕に、妹は「自閉スペクトラム症」という発達障害を持っていて、僕と同じ小学校に通うけれど、普通学級には通わずに、特別支援学級である「仲よし学級」に通うことや、妹は人が多い場所が苦手、視覚優位といって、ほかの人よりも目からはいる情報が優先されてしまうことなど妹の特性について教えてくれた。

僕が今まで外国のニュースのように感じていた遠い世界は僕のすぐ隣にあったのだ。

それから僕はネットやYouTubeなどで発達障害についていろいろ調べた。少しでも妹の事を理解してあげたかったし、妹が発達障害だとは全く気付かなかったから、もしかすると僕の周りに、他にも障害で本当は助けや理解を必要としているのに、気が付いてもらえない人がいるかもしれないからだ。

妹が小学校に入学してしばらく経った全校朝会。僕が今でも思い出したいくない記憶。その日の朝会では、妹は終始大きな声で泣いていた。きっと人が多い場所で不安になつてのだと僕は思った。僕はすぐにでも妹の隣に行つて、大丈夫だよ、怖くないよと言つてあげたかったが、朝会中なので移動することができず、自分の不甲斐なさを感じていた。その時、僕の耳には信じられない言

葉がいくつも飛んできた。

「うるさいな、外に出せよ。」「なにあの子泣いてるの。」「なにあいつやばくない。」など耳をふさぎたくなるような、ナイフのような言葉だった。僕は心臓を掴まれているような嫌な気分になった。更にふつふつと怒りが込み上げてきた。妹は泣き虫なくせに誰かが泣いてると必ず背中をさすりに行く心が優しい子なんだ。お前らに何が分かるんだ、と怒鳴ってやりたかった。でも僕にはそれはできなかった。妹の泣き声と心無い言葉だけが僕の心を支配した。その日の朝会は何の話だったか覚えてない。

その日の夜、妹に向けられた酷い言葉について考えた。その結果「きつとみんな妹のことを、障害の事を知らないからあんな言葉が出てきたんだ。」という結論に達した。だから僕はこの作文でみんなに発達障害の事を少しでも知ってほしい。

発達障害の特性は、個人によって様々である。そして見た目では発達障害かどうか分りにくい。だから周りや社会から理解されにくい。でも特性は欠点ではないという事をまずは知ってほしい。見る角度を変えればそれが長所になる。妹は泣き虫で人が多い所は苦手という特性があるが、その分周りの泣いている子や不安そうな子のことをいち早く察知して、励ますことができる。僕は

これは妹の特性ではなくチャームポイントだと思ってる。

次はアンコンシヤス・バイアスについてだ。これは「無意識の偏見」ともいい、障害者だから何を考えているか分からない等、相手を障害者だと理解した上で、当事者が無意識におこしてしまう偏見の事である。無意識というのはある意味、わざとよりも残酷で厄介だと思う。だからみんなには、人のできない事を見つけないのではなく、できる事、良い所を見つけてほしい。みんなが知っているエジソンやアインシュタインも発達障害だったのではないかと言われている。この偉人達が歴史に名を残しているのは、自身や周りが出来ない事を見つけたり指摘したのではなく、出来る事を見つけ続けた結果なのではないかと僕は考えている。だからみんなにも人の良い所を見つけ続けてほしい。

妹は僕にたくさん事を教えてくれる。それは勉強や知識とかよりも、もっと大切なことだ。だから僕も妹から教えてもらった事をもっとみんなに教えていきたい。いつか当たり前に理解してもらえる日を目指して。

## 特別優秀賞

（日本空港ビルディング株式会社賞）

### 私の兄のこと。

練馬区立石神井中学校 二年

前まえ川かわ さ や

私には、ダウン症の兄がいます。兄は、障がい者と呼ばれます。この作文では、そんな兄を受け入れて、大好きだと言えるようになるまでの、私の話をしようと思います。

ダウン症は、染色体異常によって心身の発達に遅れが見られるという障がいです。顔つきも、話し方も特徴的です。それでも、小さい頃からずっと一緒に過ごしてきた兄のことは、とても大切に思っていました。しかし、ある日、そんな私の考えを変えてしまった、忘れられない出来事が起こりました。

小学校の、授業参観のときのことです。その日は、両親と兄の三人が私の授業を見に来てくれました。でも、なぜかその日は、授業が始まってからクラスがそわそわとして、落ち着きがないことに気づきました。なんだろう、と思ってみんなの視線の方向に向くと、そこには兄

がいました。みんなのじろじろとした視線は、明らかに、私の兄の方へと向けられていた視線でした。くすりと笑う人もいました。もしかしたら、別のことで笑っていたのかもしれない。けれど、その笑いは、私の心を深くえぐりました。幸い、私の兄だとはみんな知らなかったようで、その瞬間、よかった、と思いました。その瞬間、罪悪感が、私の中に充滿しました。兄のことを、一瞬でも恥ずかしいと思ってしまった自分が大嫌いになりました。

その日は結局、授業に全く集中できず、ずっと下を向いていました。「私のお兄ちゃんを馬鹿にしないで」と言う勇気が出せるほど強くもなくて、そんな自分が嫌いでした。

それから、兄と出かけることが、怖くなりました。どうしても急用で出かけることになっても、周りにクラスメイトがいなかを確認してから出かけるようになりました。みんなが楽しみにしている授業参観は、私にとってはとても苦痛でした。兄は何も悪いことをしていないのに。ただ授業参観に来ているだけなのに。私が一番、兄のことをわかってあげなければならぬのに。けれど、やっぱり周りの目を気にせずにはいられませんでした。

私は、そんな私から少しも変われずに、中学生になり

ました。部活にも入り、先輩たちはみんな優しくして、人見知りな私もすぐに馴染んでいきました。そして、私を救ってくれた出来事も、この部活で起こりました。

その日は練習試合でした。先輩たちと一緒に出る、団体での試合でした。前日まで、すごく楽しみでしたが、当日になって、両親が、兄と一緒に応援に行くと言い出したのです。父がどうしても連れて行くといっているので、渋々受け入れました。試合会場についても、私の不安はなくならず、何度も小学校の時のことが頭をよぎりました。大好きな先輩だからこそ、兄のことを知られたくないと思う気持ちがあり、その気持ちに気づくたびに自分が嫌いになりました。そして、もうすぐ試合が始まるところで兄と両親が応援にきました。先輩たちも気づいたようで、私は怖くてたまりませんでした。けれど、私の予想は大きく外れました。先輩たちは、ただ普通に接してくれたのです。他の人と変わらない、普通の態度で接してくれました。そんな先輩たちのおかげで、私は、ずっと言えなかったことを、すんなりと言うことができました。

「私の兄なんです」

それだけのことです。それだけのことを、以前の私なら、絶対に言えなかったはずなのに。自分で自分に驚いていると、先輩は優しく笑って、

「そうなんだね」  
と言ってくれました。その一言で、私はとても救われました。

それから、障がいは個性なのだと気づきました。私達それぞれがもっている個性の一つ。独特な顔立ちも、話し方も全て。人それぞれ違うのは当たり前です。むしろ、自分にしかない個性を持っている人たちは、もっと自分のことを誇って良いと思います。障がい者の方たちの中にも、自分だけの特技を活かして活躍している人たちがたくさんいます。ですが、まだ、兄のことを差別的な目で見てくる人もいます。だからこそ、そんな人達が、私の作文を読んで、少しでも変わってくれたら嬉しいです。

そして、私はもう昔のように、兄のことを恥ずかしいとは思いません。兄だけの個性を持った兄のことが、私は大好きだと胸を張って言えます。

それぞれの個性を受け入れ合う、そんな優しい社会になることを願っています。

## 優秀賞

## 偏見と不平等がない世の中へ

荒川区立第四中学校 二年

竹内 柚希

私には『ディスレクシア』という特性がある。小学生になった時、だんだんと学年が上がり漢字が難しくなっていくにつれ、漢字がどうしても覚えられなくなってきた。たくさん検査を受けて、小学四年生の時に、やっと診断がついた。自分がダメだから漢字が覚えられないんじゃないんだ！と分かって、ホッとしたような気がする。

ディスレクシアとは、文字の読み書きをするのが、普通の人のようにスラスラ出来ない脳の機能障害だ。人によって色々な困難があるそうだが、私に関して言えば、漢字の形を記憶して思い出しながら書く事が難しい。いつも学校の課題を書く時は、家でパソコンを使って原稿を作ってから、手書きでそれを清書している。清書するのも時間もかかるので大変なのだが、この作文はパソコンで書いたものを印刷してそのまま提出出来るので、

いつもより負担が減って嬉しかった。

今まで私自身が、特性のせいで偏見を受けたり、不公平に感じたりする事があったから、今回その事を作文にしたいと思った。

進学先の学校を探す中で、高校の説明会へ行った時のことだ。特性がある話をする時、相談先の先生の態度が急に変わり、学校の説明すらしてもらえず、パンフレットだけ渡されて帰された。その先生は「うちの学校に入ってもらっても特別扱いは出来ないから、もし受験したいならよく考えてから決めてください。」と言っていた。私がすごく興味があり入学したいと思っていた学校だったので、とても悔しくて悲しかった。それも、ひとつだけではない。特性がある事で、入学を歓迎してもらえない学校はたくさんあった。

その事を主治医に話すと「目が悪い人はメガネをかける事で対等になれるように、配慮する事で対等に近づけるのが合理的配慮。特別扱いとは違うのにな。」と言っていた。

目が悪い人はメガネを付けることを当たり前に受け入れてもらえるのに、ディスレクシアのような珍しい特性は、なぜ受け入れてもらえないのだろうか。なりたくてこんな特性があるわけではないのにひどいと思った。本当に不平等で悔しいと思った。学ぶ権利が奪われた気が

した。

私は今、中学二年生だけど、まだ一年生の頃から、私の特性も受け入れて歓迎してくれる進学先を探すために、母と一緒にたくさん学校の足を運んでいる。

そんな中、やっと自分の特性も受け入れて歓迎してくれる学校が見つかった。そのままの私を受け入れてくれるっていう事が、とても嬉しかった。だから入学できることを目標に勉強を頑張ろうと思えた。

今在学中の中学校でも、入学当初はテストの時に、回答は合っているのにひらがなだったせいで不正解になっていて、「もう勉強しても意味がないんじゃないか。」と絶望した。しかし今は、主治医や先生方の協力があり、学校に私の特性を理解してもらえて、合理的配慮をしてもらえることになった。今の学校では、学ぶ権利を尊重してもらえているので、安心して勉強することができ

る。でも、世の中には特性や障害を受け入れてもらえずに、諦めてしまう人がたくさんいるんじゃないかと思う。

私の母は、特性がある子供の親の会や、コミュニティに入っていて、常に情報収集している。特性がある事で偏見を受けるのは、進学だけではなくて、塾や習い事、就職にまでも、偏見の影響があるそうだ。実際、私の塾

を決める時にも「特性がある」と一言言っただけで、詳しく説明する前に断られたこともあったと言っていた。

特性や障害のせいで、自分の可能性を諦めてしまう人がいなくなる世の中になって欲しい。もっと、世の中の人に自分のような障害を抱えた人がいることを知ってもらいたい。そのために私ができる事は、特性を恥ずかしい事だとは思わずに、発信していく事かな、と思う。そして、自分もしてもらっているように、困っている人を助けられる人になりたい。

もし誰かを偏見の目で見てしまいそうになった時は、それが自分や自分の大切な人だったらどうするのか、同じことが出来るのか、考えてみてほしい。その上で偏見や差別をするのではなく、温かい目で見守って、手伝ってあげてほしい。

自分にはこの特性をどうにかすることはできないけれど、他の得意な事の幅を広げて、将来は、少しでも社会や誰かの役に立てるような人になりたい。自分でどうにか出来ることは、努力して一人で出来るようにしたい。やっと目標を見つけた事が出来たから、その目標に向かって地道に頑張って勉強していきたいと思う。

## 優秀賞

## 知ってほしい自分のこと

日野市立日野第四中学校 二年

萩生田 彩音  
はぎうただ あや ね

私には障害があります。こうやって自分の嫌いなところを書くのは初めてです。クラスみんなや先生にも、一度もこのことを言ったことがありません。

私は吃音症です。吃音症は日本に約百二十万人、つまり百人に一人（日本財団より一部引用）が当事者であり、まだ理解が広がっていません。吃音にも種類があり、私は言葉の始めの音を繰り返してしまう「連発」、うまく言葉が出ずに間が空いてしまう「難発」の症状が多いです。幼稚園に通っていた頃は発症していなかったのか記憶に無いのか分かりませんが、特に何も気にせず、活発に遊んでいました。

しかし、小学二年生のとき、私は吃音症を自覚しました。このとき、正式には、吃音症という言葉自体は知りませんでした。そして自分の喋り方が変だ、気持ち悪いな、と思うようになりました。

小学三年生に進級して、クラスが変わりました。私は、クラスが変わって不安だったことや、自分が挙手して当たって、発言するときに変な喋り方になったらどうしようという不安があり、ほとんど発言しませんでした。

私が変わったのは、この時期でした。ある日の外国語の授業で、クラスみんなでクイズ大会のようなものをしていました。先生がクイズを出す前に、色々な国の挨拶を教えてくださいと、一通り覚えた上でテレビのモニターに映る国の挨拶を挙手制で答えるというものでした。みんなは順調に答えていったのですが、五問目くらいになると、急にみんなの勢いが消えました。みんな、この問題が分からなかったからです。私は分かっています。先生は「誰か分かる人いない？」と笑顔で私たちに聞いかけました。私は「みんなが分からない問題を私が答えたら、かっこいいんじゃないか」と思い、ゆっくり手を挙げました。先生に指され、私は立つて答えました。

運が悪く、私は答えの最初の文字を連発してしまいました。一番後ろの席だったので、クラス全員に最初の連発が聞こえたわけでは無いと思いますが、座った瞬間、前の席の友達に、そのときの真似をされました。それも半笑いで。顔が熱くなって、心臓がギュッと握りつぶされたような感覚になりました。

その後も、その友達は私が変な喋り方をするたび、私の真似をしてきました。私以外のみんな、つまり吃音症では無い人からしたら、大したことないのかと思うかもしれないませんが、私にとって、このようなことは苦痛ではありませんでした。今でも当時のことを思い出すと涙が出てきて、心臓がバクバクします。

小学生のときはそれで終わりました。でも中学生になって、また苦しいことがありました。国語の音読の時間と社会の音読の時間、小学生のときは無かった難発が発症し、先生やみんなに「漢字が分からなくて止まっているんだ」「読む場所が分からないんだ」と誤解され、漢字の読み方や読む場所を覚えてくれるのですが、私は漢字が分からないわけでも無く、読む場所が分からないわけでもありません。優しいみんなや先生に申し訳ないし、教えてくれても言葉が出ないときは自分が本当に憎らしく思います。

吃音症は、自然に治るものです。私の努力では、多分どうにもなりません。だからこそ、沢山の人に理解してほしいと思っています。吃音症は発話障害の一つとして分類されています（国立障害者リハビリテーションセンター研究より一部引用）。私は「障害」があるから特別扱いして欲しいとか、仲間外れにして欲しいと思っ

て、何回も傷ついたからこそ、私はこの世界を変えたい。人が人を傷つけて何が楽しいのか、私には分かりません。傷ついた人も、傷つける人も同じ「人間」であることが信じられません。

障害の有無に関わらず楽しめるスポーツや、誰でも使いやすいデザイン。それらを作り出す前に、人間自体が変わらないと、世界は何も変わりません。障害を持つ人たちは、障害者になりたくてこの世に産まれてきたと思いますか？今の技術では、手術などで治すことはできません、代わりに何かを失ったり、高いリスクを背負ったり、原因や治す方法が分からない・無い障害を持つ人がいます。

私みたいな障害者を笑わないでください。沢山沢山努力して生きている私たちを、傷つけないでください。スタートラインは違ってても、みんなに追いつけるように頑張っているんです。少しでも理解して欲しいです。見守っていて欲しいです。何か困っていたら、手をさしのべて欲しいです。

私は将来教師になりたいです。障害があっても先生になれることを証明したいです。自分みたいに辛い思いをしている子を救います。

障害なんて関係ない。

私は本気でそう思っています。

## 優 秀 賞

## 私がそばにいる

日野市立日野第四中学校 二年

(非公表)

「死ねばいいのに。」

小学五年生の時。僕はこう言われた。心臓のドクドクという鼓動が聞こえ、目の前が真っ白になった。

どうしてこんなふうになったのか。小学生の自分には理解できなかった。

友達がいるはず。なのに、その時の自分は人間不信になった。完全に時が止まった。

言葉はものすごい力がある。人に希望を与え、時には、人を殺す。

今でも、あの地獄のようなその気持ちは、覚えている。というか、忘れられない。

はじめは軽視されがちだ。「普通、死ぬまで追いつめられる？」と思うかもしれない。

しかし、僕は死にたくなるような気持ちまで追い詰められた。もし、はじめをされなかったとしても、その人

の立場になって考えてみてほしい。

はじめは自分の存在している意味を見失う。居場所がなくなるのだ。

しかし、親に相談したら、親を不安にさせてしまうかもしれないという気持ちがあった。

はじめはエスカレートした。靴を隠されたり、教科書を隠される。そんなことが、日常的に行われた。

ある日、その時は来た。掃除中、目の前で、「学校、よく来れるよね。」

と言われた。僕の中で、何かが切れた。帰り道、決心した。親に相談することを。家に帰り、母に相談しようとした。しかし、母が何か勘付いて、こう聞いた。

「学校で、何かあった？」

涙が流れた。僕は、学校であったことを話した。母にこれまで話をした。涙が止まらなかった。母は優しく、「大丈夫だよ。」と言った。そして、担任の先生に話した。

次の日、先生ははじめの授業をした。先生は涙をこらえながらも、話してくれた。そんな先生の姿を見て、僕も涙を流してしまった。この涙は忘れられない。僕は大切に思ってくれている人がいることを忘れかけていた。

おそらく、加害者にもなんらかの理由があると思う。しかし、どんな理由があろうと、はじめをすることは良

くないことだ。それは、とても哀れで、恥ずかしいこと。自分はとても恥ずかしいことをしていると思われていることに気付きなさい。

自分の逃げ道を、いじめをすることにするのはやめなさい。もつと、やるべきことはあるはず。

いじめは、絶対に自分に戻ってくる。今すぐでなくても。悪いことをしたら、いつか自分に戻ってくる。それは、当然のことだ。

いじめは、一生、やられた側は忘れない。いじめられた人の傷は無くならない。いじめた人は、その傷も含め、さらに重く、大きい傷を生涯持つて生きていくことを覚悟してほしい。それは、とつても苦しいだろう。

そして、いじめられている人に告げたい。目の前に光が見えないかもしれない。それでも、あなたを大切に、愛してくれる人はいる。それを忘れないで。苦しくなつても、生きる意味を見失つても、その人たちのために、負けないでほしい。

「今」は、今しかない。そして、時は過ぎて行く。今がどんなに辛くても、目をつぶつて、深呼吸をして、自分の大切な人を思い浮かべてみて。

誰かに、相談することは恥ずかしいことではない。むしろ、人に弱みを見せれる人は、強い人だ。勇気を出してみて。そして、助けを求めて。大丈夫。安心して。僕

が保証する。諦めたらそこで試合終了。あなたが諦めなければ、明るい未来は、きっと、目の前にある。

そして、いじめをただ横で見ている人に告げたい。あなたの一言で、一人の命を救えることを分かかってほしい。周りに流されるより、自分の心に正直な人になってほしい。怖いのなら、みんなの前でなくてもいい。その人に寄り添ってあげて。それだけで、救われる人がいる。

周りに、元気のない人は、見かけなかった？

もし、いるのなら、見て見ぬふりをするのではなく、声をかけてみて。そして、一人を救えるから。あなたも、誰かにとつて唯一無二の、大切な一人なのだから。

どこを向いても、みんなの笑顔があふれている。そして、いじめで苦しむ人が居ない。そんな世界が広がりますように。



## 優秀賞

## 自分らしさを信じて

西東京市立明保中学校 一年

栗本莉瑚

「女子なのに野球してるんだね」私はこの言葉を、これまで何度も投げかけられてきました。驚いた顔で言う人もいれば、あきれたふうに言う人もいました。私にとつては、ただ好きなことをしているだけなのに、その一言がまるで「ふさわしくない」と言われているように聞こえて、胸がつまる思いでした。小学生の頃から私は野球が大好きで、テレビで試合を観るのも、父とキャッチボールをするのもとても楽しい時間でした。小学校では男子に混ざってチームに入り、バットでボールを打ち返した時の感動や、チームで勝利した時の喜びは今でも心に残っています。

中学校でも野球を続けたいと思い、入学してすぐ部活動の見学に行きました。ボールの音、先輩たちの笑顔、楽しそうにプレーする姿を見て、私もこのチームの一員になりたいと強く思いました。ところが、数人の生徒か

らこういう声が聞こえてきました。「女子って野球部に入れないでしょ」「マネージャーになりたいのかと思っただ」その言葉を聞いた時、私は声が出ませんでした。野球をしたいという自分の気持ちは間違っているのか、女子がプレーヤーになるのはおかしいことなのかと、自信がぐらついたのを覚えています。家に帰ってからその言葉が頭から離れず、野球を続けるのが少し怖くなりました。「女子なのに」という何気ない一言が、自分の気持ちを小さくする力を持っていることを、そのとき私は初めて実感しました。

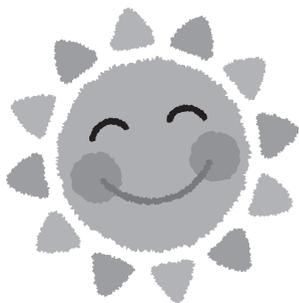
そんな時、ある本と出会いました。橘田恵さんの『女子野球の未来を創る いまできることを全力で』という本です。そこには、私と同じように野球が大好きで、「女子だから」という理由でプレーを制限されてきた著者の経験がこぼれ出ていました。それでも著者は諦めず、自分の夢や思いを信じて進み続けていました。周りからの偏見や壁にぶつかりながらも、自分らしく生きる道をあきらめなかった姿に、私は深く心を動かされました。本を読み終えた時、私は強く勇気をもらいました。

私は、ただ好きなことを大切にしたいだけです。しかし、「男はこうあるべき」「女はこうあるべき」といった考え方が当たり前のように存在し、その中で自分の気持ちを押しつぶされそうになることがあります。「自分ら

しくあること」がこんなにも難しいのだと、そのとき初めて気付きました。そして私は、これは野球の話だけではないように思いました。性別に限らず、恋愛の在り方や性の自認が少数派である人たち、いわゆる性的マイノリティの人たちも、同じように「自分らしく生きたいのに、それが認められない」と感じているのではないか。「女子らしく」「男子らしく」という固定観念が、世の中の様々な場所で人の心をしばっているように感じます。「ふつう」や「当たり前」とされているものが、そこから外れた人を「おかしい」と決めつけてしまう。そのことがどれほど人を傷つけ、孤立させるか、多くの人にもっと知ってほしいと思います。

人は一人ひとりちがっていて当たり前です。好きなこと、得意なこと、話し方、服の好み、考え方、それに性別や恋愛の在り方も、全てが同じである必要はありません。むしろ、ちがいがあるからこそ、お互いを理解し合ったり、尊重しあったりできるのだと思います。私はこれからも野球を続けていきたいです。そして、「女子だから」という言葉に負けず、自分の気持ちに誇りを持って歩んでいきたいです。また、周りの人に対して「こうあるべきだ」と決めつけるのではなく、その人の感じ方や生き方を受けとめられるようになりたいです。自分らしさを守るということは、同時に、誰かの

「ちがい」を受けられることでもあるのだと、私は今回の経験から学びました。これからの社会が、多くの「らしさ」を大切にできる場所になっていくことを願っています。そしてそのために、私自身もできることから行動していきたいです。例えば、周りの人の声に耳を傾けること。ちがいに気づいたとき、それを否定するのではなく、理解しようとする。そして、すぐに分かんなくとも、相手の感じていることに寄り添い、その人がひとりぼっちにならないようにそばにいても、大切な人権の守り方だと思えます。誰かの「当たり前」が自分とまっぴいします。そんな一歩の積み重ねが、きっと社会を少しずつ変えていく力になるはずです。



## 優秀賞

## 私と、もう一人の「人間」

東海大学菅生高等学校中等部 三年

山崎 典

5才から8才まで、私はインドネシアのジャカルタで暮らした。父の仕事の関係で慣れない海外生活が始まったが、不安な私をいつも温かく支えてくれた人がいた。送迎の運転手さんだ。

言葉も通じなかったけれど、運転手さんはいつも笑顔で私に話しかけてくれた。運転手さんは送迎の仕事の休憩時間でも、いつでも私と家の前の公園でボールを蹴って遊んでくれた。言葉の壁を越えて、ボールを追いかけると、運転手さんの笑顔は太陽のように輝いて見えた。

ある日、私が大好きな日本の曲を口ずさんでいると、運転手さんは一生懸命に覚えてくれた。次の日から、彼は少し違う発音ながらも、私と会うたびに歌ってくれた。言葉は完璧に通じなくても、一緒に歌を歌うだけで、心は通じ合うのだということ、運転手さんは私に教えてくれた。3年という月日はあつという間に過ぎ、

日本に帰国する日が来た。最後に運転手さんに会った日、私は涙が止まらなかった。言葉や文化、肌の色が違って、私たちには温かい友情があった。

日本に帰国してからも、私は運転手さんとの思い出を忘れることはない。しかし、テレビやインターネットで、外国人への偏見や差別的な言葉を耳にするたび、胸が締め付けられるような思いがする。なぜ、私たちは、見かけや出身地だけで、誰かを判断してしまうのだろうか。

かつて、私にとって運転手さんは「外国人」という言葉でひとくくりにされる存在ではなかった。彼は、私に笑顔と温かさを教えてくれた、大切な「人間」だった。私たちはお互いを「人間」として向き合うことができ、温かい心の交流を生み出したのだ。

日本で暮らす私たちは、異文化を持つ人々と出会う機会が格段に増えている。しかし、そうした交流の場において、私たちは「外国人」というレッテルを安易に貼り付けてはいないだろうか。「日本語が上手だね」と、まるで日本語を話すことが特別であるかのように扱っていないだろうか。「外国人はみんなこうだ」と、たった一人の言動からその国の全体の人々を決めつけていないだろうか。このような無意識の偏見は、時に悪意のある差

別よりも根深く、人々の心に深い傷を残す。

人権作文コンテストの入賞作品には、陰口や、いじめといった身近な問題から人権について深く考えたものが多くある。それらの作品に共通しているのは、「想像力」の大切さだ。自分とは異なる境遇に置かれた人の気持ちを想像すること。もし自分が同じ立場だったら、どんな気持ちになるだろうかと考えること。この想像力が他者への共感を生み、差別や偏見を防ぐ第一歩となる。

運転手さんとの出会いは、まさにこの「想像力」の重要性を私に教えてくれた。言葉が通じない中でも、運転手さんは私の表情や仕草から気持ちを読み取ろうとしてくれた。そして、私もまた、彼が何を伝えたいのか、どうすれば彼に伝わるかを必死に考えた。言葉の壁があったからこそ、私たちはお互いの心に寄り添おうと努力したのだ。

人種を差別することに意味などない。大切なのは、肌の色や国籍といった表面的な違いではなく、その人の内側にある心と向き合うことだ。私たちが「外国人」という言葉の代わりに、一人ひとりを尊重し、その人自身を理解しようと努めるなら、世界はもっと温かい場所になるだろう。

私は、運転手さんとの出会いを通して、このかけがえない教訓を学んだ。そして、この学びを胸に、これか

らも人との出会いを大切にしていきたい。国籍や肌の色といった表面的なものではなく、その人自身と向き合い心を通わせられるような人間になりたい。そして、将来は言葉や文化の違いを超えて、多くの人と心を通わせられるような仕事に就きたい。運転手さんと交わした「また、いつか」という約束を胸に、私はこれからも生きていきたい。



# 奨励賞

## 『いつかきつと…』

東京学芸大学附属竹早中学校 一年

白土治子

「あの人、頭おかしいから近寄らない方がいいよ。」

下校途中、バスに乗っていた時でした。乗客の皆に、「こんにちは。こんにちは。」と声をかけまわっている高校生を見て、ヒソヒソ話をしている人達の声が耳に入りました。その言葉は、私の胸に痛い位強く突き刺さりました。近寄らない方がいいと言われていた高校生が着ていた制服が、兄と同じ特別支援学校のものであったからです。「あの人、頭おかしい。」という言葉は、兄に對してもかけられている様な気がして、そして、「おかしいわけじゃないんだよ。」と言ってあげられなくて、苦しくて、思わず下を向いてしまいました。

障害のある人が身近にいない人達にとっては、きっと、障害のある人のあらゆる行動や言動が奇異に感じられるのかもしれませんが。しかし、世の中のだれ一人、自分と全く同じ人はいない様に、「障害」も、自分と違う、

その人の個性なのに、なぜ「障害がある」という事で、変な目で見られたり、心ない言葉をかけられたりしなければならぬのでしょうか？

私の兄は発達障害があり、高校生になる今まで、一度も言葉を話した事がありません。話さないというよりも、話せないと云った方が正しいかもしれません。伝えたい事がある時は、「あっあっ。」や「ばばば」といった声を出すので、その度に、周囲の人からおかしな目で見られます。できない事もたくさんあり、字も書けないし、一人で外出するのも難しく、登下校も父や母がつきそっています。私は生まれた時からこの兄と、ずっと一緒に暮らしているので、兄の事をおかしいと思つた事はなかつたし、困っている時には、単純に手を貸してあげればいいのだと、当たり前のように思っていました。もちろん、これまで兄を気遣ってくれたり、温かい言葉をかけてくださる人達にもたくさん出会いました。ところが、幼稚園、小学校、中学校と兄も私もどんどん成長していくにつれ、周囲の兄に對する目は、優しいものばかりではない事に気づかされました。公園で遊んでいても、「あの子、変。」と指さされたり、お店に行つても嫌な顔をされる事もたくさんありました。あいさつの時、言葉が出ないために頭をさげるだけの兄を見て、非常識だという人もいました。「あんな家族がいてかわいそ

う。」と勝手に決めつけられる事もありました。こうした数々の嫌な思い出がトラウマになって、いつの間にか、自分から友達に兄の事を話せなくなってしまうました。友達にからかわれたり、嫌な言葉をかけられたりするるのが怖くなってしまうからです。

障害のある家族がいる事は恥ずかしい事ではないし、逆に困っていたら手を差し伸べたいという気持ちになるはずなのに、「なぜ、こんな思いをしなければならぬのだろう?」「どうすれば、健全者、障害者といった区別がない世の中になるだろう?」と、自分なりによく考える様になりました。障害のある人が住み良い街づくりとして、段差を無くす事や、音声機能を充実させるなど、技術的なバリアフリーはどんどん進んでいます。心のバリアフリーについては、まだまだ発展途上にあります。

障害のある家族のいる人々の多くは、障害を特別視せず、いろいろな場面で協力しながら生活していると思います。それは、私がそうであった様に、障害のある人がいっしょにいるのが当り前の生活を送ってきたからです。学校や習い事、遊び場、職場どこにおいても、健全者、障害者というワケがはじめから無かったら、そして、障害者がとりにいる事がふつうの世界だったら、障害者を見て、

「あの人、頭おかしい…。」  
 と言う人は、いなくなるのではないのでしょうか。すぐには難しいかもしれないけれど、小学校などの段階から、国語や算数と同じ様に教科の一つに「障害」ができて、理解が深まればいいなと思います。そして、障害がある人自身はもちろんの事、その家族も、人目を気にする事なくふつうに受け入れてもらえる優しい社会が一日も早く来る事を心の底から願っています。いつかきつと、そんな日が来ると信じています。



## 奨励賞

## いじめについて

品川区立浜川中学校 七年

芦澤汰劍

人権問題を考えた時、最初に僕の頭に浮かんだ事は、僕自身が小学校の時に経験した事です。気づかないで人を傷付けている人も、いじめにあつて、どうしたら良いか分からない人もいると思います。僕は、いじめにあつた側の気持ちから、いじめについて考えたいと思いました。

いじめという言葉聞いた時、まず思い浮かぶのは、悪口や陰口だと思います。でも、何もしない、相手をまゐるで空気の様に扱う事も立派ないじめだと僕は感じます。

僕は、小学校三年生から、クラスの決まった人達から色々嫌な事を言われたり、嫌がらせをうけるようになりました。でも、それは僕にも原因がありました。僕は、一年生から一週間に一回、学校の特別支援級の、ひだまり教室という場所に通っていました。それは僕がまだ自

分の気持ちを上手く表現できなくて、すぐに怒ってしまったり、物に当たってしまった所があったからです。だから最初は僕に対してのきつい注意の言葉も仕方ない、僕も悪いんだと思っていました。でも、それはすぐに関係のない僕への悪口へと変わっていききました。

ある日、教室での授業の時、いつもの人達から先生に聞こえない様に、しつこく悪口を言われました。最初は我慢していたけれど、耐えられなくなって、その中の一人を怒って追いかけて回してしまいました。何も知らない先生は、僕の事を皆の前で怒鳴りました。僕は悲しいのと悔しい気持ちで頭が一杯になって泣いてしまいました。落ち着いてから、ちゃんと先生に話しましたが、僕の話は、どこまで信じてもらえたのか分からず、どちらが悪いという事になりました。それから、その人達の悪口は続き、僕が乱暴だという印象がクラスについて、皆から避けられる様になりました。遠足も、グループ行動でも話しかけてくれる人は誰もいなくて、僕は一人でした。でも、クラスの写真やグループの写真の時は、辛い顔を写される事が嫌で無理して楽しそうな表情をしました。無言で食べるお弁当は味がしなかったです。心の中で、早く安心な家に帰りたくて仕方がありませんでした。休み時間、周りには、たくさんの人達がいて、皆楽しそうにお喋りしたり遊んだりしているのに、僕の周り

だけは、まるで別の時間が流れているみたいに静まりかえっていました。自由帳に電車の絵を描いたり、校庭の隅にある池の周りを歩く事が、僕の休み時間の過ごし方でした。僕は、その時、自分がまるで存在しない透明人間みたいだと思いました。悪口を言われなくても、気持ちが悪くこんなにも苦しくて辛くて傷つく事があるんだと分かりました。

中学生になった今でも、思い出すと心がとても苦しくなる思い出です。できれば一生思い出したくない思い出だけど、でもこうして作文に書いてみようと思ったのは、この小学校三年から六年までの事が僕にとつて、他の人の気持ちを考える事ができる、きっかけになったからです。僕は、もし傷ついている人がいたら、それに気がつける人でいたいのです。そして声をかけてあげたいです。それは、あの時、もし誰か一人でも僕に優しい言葉をかけてくれたら、どれだけ嬉しかったか分かるからです。いじめられると、もしかしたら自分に悪い所があるのかもしれないと思ってしまう。僕もそうでした。ひだまり教室の先生に相談して、自分の良くない所を一生懸命に直す努力をしました。でも、クラスの人達の態度は何も変わりませんでした。僕が今、いじめにあつて辛い思いをしている人に言いたいのは、自分が悪いのではないのかと責めなくて良いという事です。いじ

めは、いじめている側が悪いと今なら分かります。そして、もしもいじめられている人がいるのに知らないふりをしていたら、それは一緒にいじているのと同じだと気がついて欲しいです。無視や無言が、いじめられている側には、悪口を言われているのと変わらないくらいに深く傷つく事を知って欲しいと思います。皆が、誰かの心の痛みに気がついたり、相手を思いやる気持ちをもつ事で、いじめは無くなっていくのではないかと僕は思います。

僕は今、中学生になって、たくさんの友達ができました。

でも、あの頃の気持ちを忘れずに、相手の気持ちを考えられる人になりたいです。そして、今の友達を大切にしたいと思っています。



|             |
|-------------|
| 奨<br>励<br>賞 |
|-------------|

## 戦争と人権

大田区立大森第十中学校 三年

川<sup>かわ</sup>上<sup>かみ</sup>日<sup>ひ</sup>奈<sup>な</sup>多<sup>た</sup>

終戦から八十年が経過する今年。私は修学旅行で長崎に行き、平和学習の一環として原爆資料館を訪れました。長崎は、広島に次ぐ世界で二番目の被爆地です。資料館で見た戦時中の悲惨な写真や原爆投下時刻である「十一時二分」で針が止まった柱時計のモニUMENTが今でも目に焼き付いています。また、当時の被爆者の方の講話では、原爆の威力や被害について詳しく聞くことができました。大量の放射線を浴びることによって引き起こされる原爆病と呼ばれる後遺症のこと、そして今もなお原爆病に苦しんでいる人々が大勢いると知り、原爆や戦争の恐ろしさを痛感しました。八十年前に起こった悲劇を教訓に、二度と戦争をしてはいけないと私たちは学びました。

しかし、修学旅行から帰宅してテレビを付けると、ロシアとウクライナ、イランとイスラエルなど戦争のニュー

スが当たり前のように流れていました。私たちが長崎の地で平和について学んでいるまさにあの時間にも、地球のどこかでは戦争が行われているのです。世界中の人々が、戦争をしてはいけないとわかっているはずなのに。それが、私には信じられませんでした。私が学校で勉強をしているあの時間、クラスのみんなでおいしい給食を食べているあの時間にも。戦争の脅威に怯え学校に通えない子どもたち、まともな食事が取れない子どもたちがいるということに、私は胸が張り裂けそうになりました。

「戦争は最大の人権侵害」と言われています。その国に住んでいるからという理由だけで、行きたくもない戦地に兵として送り込まれたり、無関係である大勢の一般市民の命が奪われてしまいます。人権とは、「人々が生存と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」で、誰もが生まれながらに持っている人間が人間らしく生きるための権利です。私たち一人ひとりが持っている人権というものは、本来誰にも奪うことができない、とても尊いものであるはずです。しかし、戦争は「自由」や「平等」といった権利を人々から奪い、さらには「生きる」という権利までも奪ってしまいます。日本でも今、インターネット上での誹謗中傷、ハラスメント、障害者やマイノリティに対する差別などが人権侵害として

問題になっていますが、世界では戦争により人権侵害と呼ばれる前に、侵害される人権そのものが命とともに奪われています。

最大の人権侵害である戦争を世界からなくし、平和で安全な世界にするために、一体何をすればよいのでしょうか。戦争を体験していない今の私たちにできることは、過去に起きた歴史から学び、今世界で起きている戦争や紛争の現状から目をそらさず、戦争の残酷さ、それにより失われる命の重さを「知る」ことだと私は思いません。戦争の体験は無くても、戦争について知ることはできます。知ることから得た様々な考えを皆で共有し、当事者意識を持って、二度と過ちを繰り返さないよう、後世に語り継いでいくことが大切だと私は感じます。人権は、平和の上で成り立っているということを、私たちは深く胸に刻まなければなりません。様々な文化や価値観に触れ、自分以外の他者を尊重し、相手の立場に立って考えることで偏見や差別をなくすことができます。

今こうして人権について深く考えることができるのも、平和があつてのことです。「世界から戦争をなくし平和を実現する」と聞くと、とても難しいことに感じてしまいます。しかし、「人権を守る」と考えたら、どうでしょうか。もっと身近なことから始められると、私は思います。人権侵害は一人ひとりの意識を変えることに

よって、なくすことができます。人権を守るということは、人が人を大切にすること。だから私はこれからも、家族や友達など自分の周りの人を大切にし、みんなを笑顔にしていきたいです。



## 奨励賞

## わたしたちの未来

城西大学附属城西中学校 三年

高橋 さくら

二千二十五年春、我が家には大きな出来事があった。とある日の夕食、いつも通り食卓に、五歳の弟が座った。ふと顔を見ると、左顔が引きつっている。私は、「ふざけてそんな顔しないで」と言ったが、なんだか様子がおかしい。目も腫れている。母も「何かつっているよね」と言いつつもよく分からない。翌日、目の腫れで眼科を受診すると、「すぐに大学病院で検査を」と言われる。大学病院の耳鼻科で三時間、様々な検査を受けて診断された。末梢性顔面麻痺。この病気を知っている人がいるだろうか。原因不明、治療するかも分からない、人によっては一生治らない。五歳の弟に突きつけられたこの病気に、家族全員泣きまわった。そして色々を悔やんだ。原因不明、あの時の食事が悪かったのか、水泳教室でうつったのか、公園で砂をさわったからなのか、いくら考えてもいつも通りの生活しか送っていない中で、

原因が分からなかった。まだ五歳、たった五歳、残酷すぎる。でもその時の私は、一週間後を想像さえしていなかった。

顔面麻痺は発症し一週間後に一番強く症状が出る。日に日に顔のひきつれが強くなり、見ていられなくなつた。ちょうど七日目、麻痺が最も強くなり、寝ていても目が閉じなくなつた。左口は動かさず飲み物もこぼした。怖いくらい、麻痺の顔は酷かった。弟自身もストレスを抱え、この日の夜、腹痛を訴え、とうとう救急車を呼ぶ事態にまでなつた。運ばれた別の病院でも、「麻痺は治るか分かりません」と言われたそうだ。治らない病気に、私は生まれて初めて直面した。恐怖に震えた。明日からの弟の人生がどうなってしまうのか。外を歩けるのか、友達に何ていわれてしまうのか、私も弟のことをなんて説明すればいいのか、私も涙が止まらなかつた。

母が次の日から動き出した。通っているインターの幼稚園の先生に、習い事の教室へ、弟の病状を説明する事細かな手紙を作っていた。少しでも今まで通りの生活をさせてあげたかったのだろう。母が言ったことを今でも鮮明に覚えている。「病気になつたって、この子には人権があるの。それを守るのが家族の役目」その時は意味がよくわからなかつた。

習い事の教室からは「他のお子様全ての言動を管理す

ることは出来ない。傷つく言葉を言われるかもしれない。そこは了承してくれ」と言われたと母が泣いていた。確かにそうだとは思う。でも、そうならないように何が起きないのかと、私も苛立った。

だが、幼稚園は全く違った。弟の幼稚園は米、仏、ベトナム、韓国、中国など多国籍の子供が通っているインター。その一人の日本人の先生が、「大丈夫ですよ。今まで通りの生活が出来る限り叶うよう、精一杯やりまします。日本では障害や病気が、まだまだ隠すもの、という捉え方をされますが、海外では一つの個性としてみんなが認め合うのですよ」と教えてくれた。片足を事故で義足になった子供が入学してきて、最初の休み時間にもうみんなでサッカーをしたそう。誰も何も足のことなんて言わない。正直、驚いた。日本の学校ではなかなかありえない状況だと、公立小学校を卒業した私は思った。そんな考え方、文化、国民性があると知り、弟にも笑って遊べる日がくるかもしれないと少し光が見えた。

弟が数日後、登園を再開することを決めた。もちろん、麻痺は治っていない。酷い顔だ。治るまで休ませた方がいいのではと思いつつも、治る保証がないことに、家族全員が落ち込んでいた。すると幼稚園の先生から「明日から登園再開、楽しみに待っています。今日は園でヘレンケラーの勉強をしました。目が見えない人もい

る、声が聞こえない人もいる、話せない人もいる、でもみんな同じ人間。みんな違う。そういう人も仲間、みんな生きる権利があるのよと伝えました」と連絡がきた。なんて優しいのか、これが人権なのだとは初めて知った瞬間だった。

幸い、弟は四か月後の夏、完全治癒することが出来た。本人の病気に打ち勝った抵抗力と、そして周りの優しさのおかげだと思った。今回、日本の習い事先の先生と、インターの幼稚園の先生の対応の違いを目の当たりにし、日本はまだまだ人権を尊重することが足りていないと思った。人と違うことを隠すことが美德、忍んで耐えることが褒められる、それは違うと私は思う。海外の人のように、「人と違うこと、それは障害や病気などどんなことであっても、そこには人権があり、個性に過ぎない」という思考が根付いたら、もつともつと互いの優しさにあふれた日本社会になると思う。五歳の弟が教えてくれた人の人権、私は大切にしていきたい。そして私や弟が大人になった未来に、当たり前のように全ての人間が認め合える日本社会になつてほしいと強く願っている。

|  |
|--|
| <p style="text-align: center;">奨<br/>励<br/>賞</p> |
|--|

やさやかな決意

葛飾区立本田中学校 三年

アマルジャルガル スベデー

家庭というのは、本来一番安心できる場所のはずだ。誰に怒鳴られることもなく、自分らしく過ごせて、間違えても受け入れてもらえる家庭が「ふつう」だと思っていた。でも、現実にはそんな日ばかりではなかった。

ある晩、小さな弟にミルクをあげていたときのこと。父が仕事の疲れからか、怒りを爆発させた。大きな声、投げられる物、母との言い合い。幼い兄弟たちが黙り込み、泣き出しそうな表情で縮こまっていた。僕も手がわずかに震えていた。僕は、妹と弟三人、父母の七人でいざやかに暮らしている。年の近い弟たちは元氣いっぱい。で朝から晩まで家の中にはいざやかだ。おもちゃの音、泣き声、笑い声その全部が生活の一部であり、同時に母の手に余るほどの忙しさでもある。父は、会社を経営し、家族のために毎日働いている。そのことには感謝しているし、僕たちの生活を支えてくれているのは確かだ。で

も、どんなに疲れていても、怒りをそのままぶつけることが許されていないはずがない。どんな子供にも、怒りではなく言葉で向き合ってもらう権利がある。

僕は時々、自分にも父に似た部分があると感じてしまう。思い通りにいかないといラつしたり、弟や妹につきつう言ってしまった。そんな自分に気づくたびに、強く後悔する。父にもきつとそういう気持ちがあるのだと思う。僕は、自分の中にある「怒りの芽」を育てたくない。誰かを傷つける言葉を当たり前に使う大人には、絶対なりたくないと思った。

学校で「人権」という言葉を学んだ時、最初はどこか遠い国の問題のように感じた。でも今は違う。人権は、家の中にも必要なものだ。怒鳴られない権利、安心して過ごす権利、自由に気持ちを伝える権利。そういった小さな「当たり前」は実は守らなければ簡単に壊れてしまう。母はいつも感情に流されず、穏やかであろうと努力している。瞑想をしたり、手づくりの石鹸を販売したり、自分を整える時間を作っている。

幼い頃、母と二人で出かけた時、あるゲームの前で足を止めた。母が前から気になっていたタイトルだったらしく、じつと手に取って見ていた。僕が「買わないの」と聞くと、「これを買ったら、きつと夢中になって家のこと忘れちゃいそうだから、やめとくよ」と笑って棚に

戻した。当時の僕には、ただのやりとりにしかな思えなかった。でも今になって思う。自分の欲を抑えて、誰かのために選択できる人は、本当の意味で強いのだと。僕はそういう大人になりたい。感情に支配されるのではなく、自分で自分を導ける人に。人間には、感情がある。怒り、悲しみ、苛立ち、悔しさ。それ自体が悪いわけではない。でも、その感情を「どう扱うか」は、自分次第だと思う。怒りを相手にぶつけて終わるのか、それとも言葉に変えて伝えるのか。自分の感情を見つめ直し、扱い方を選べる人は、きっと周りの人も大切にできると思う。

家庭の中での人権が守られることは、子供の心の安心につながる。家に帰るのが怖いと感じてしまうような空気では、どんなに愛されていたとしても、それは伝わらない。だから僕は、今の自分から変わっていききたい。怒りに飲まれるのではなく、優しさで空気を換えられるようになりたい。

未来、僕が家庭を持つときには、怒鳴り声よりも、会話が多い家になりたい。子供が意見を言えて、大人がちやんと耳を傾けられる家。誰も我慢しすぎないで、でも互いに気遣い合えるような空間。たとえ時間がかかっても、そういう場所を目指したい。「家庭だから仕方ない」ではなく、家庭だからこそ、人権が大切にされるべき

だ。僕はその考えを、これからも大事にしていく。誰かを守る人になりたい。自分を見失わず、誰かの怒りに染まるのではなく、自分の優しさで塗りかえられる人。それが僕の、ささやかな決意だ。



# 奨励賞

## 見えない壁

江戸川区立松江第六中学校 三年

相川 細

「普通」って何だろう。

僕はごく「普通」の家庭に生まれ、「普通」に学校に通い、不自由のない生活をしている。普通とは何かと問われたら答える事が出来ないが、普通という事で安心感を得られていたのかもしれない。しかし、「普通じゃない」弟が生まれ、自分の考え方、世の中の見方がガラリと変わる事となる。

弟は現在六歳だ。平成から令和に変わった二〇一九年五月。元号が変わるワクワクと、待ちに待った弟が生まれるワクワクで幸せな未来しか見えなかった。コロナで緊急事態宣言が出て先が見えない不安な日が続いたが、可愛い弟が居てくれたから乗り越えられた。母は生後半年頃から、弟は姉や僕とは何かが違うと感じていたようだ。僕は気のせいだよ、と笑ったが、母の予感がどんな現実のものとなっていく。

弟は二歳半の時に自閉症と診断された。自閉症とは社会性・対人関係の障害、コミュニケーション・言葉の発達の遅れ、行動・興味の偏り、感覚過敏が特徴的な発達障害のひとつだ。生まれつき脳機能の障害により起きているため、その症状を直すことは難しいと言われているが、専門的な支援プログラム（療育）を継続的に受けることにより、日常生活を自立して送れるよう発達を促し、困難の軽減が期待されている。

弟の場合、三歳まで発語がなく、目が合わない、反応が薄いなどコミュニケーション面や、曖昧な物事への理解のしづらさ、音、光、におい、人との接触到に敏感で感覚面で多くの困難が見られたため、療育施設に通い、ひとつひとつ困難と向き合っている。施設の先生、言語聴覚士さん、作業療法士さん、理学療法士さん、皆の力を借りて、弟も僕たち家族もたくさんの成長と学びを得ている。日本の福祉はこんなにも手厚く温かく、ありがたいものなんだと身をもって感じた。

彼と共に過ごしていく中で、自閉症の人は見た目からは困難さを持っていると判別しづらく周りの理解を得られないという事、彼のように生きづらさを持っている人がこの世に想像以上にたくさんいる事を知った。

障害を持っていても、分かってもらえず、自分たちとは違う行動や感覚に「普通ではない」というレッテルを

貼られてしまう事が、自閉症の人に限らずあらゆる障害を抱える人にとって何よりも辛い事なのではないかと思つた。現に弟は、そのレットテルを貼られてしまう事により、通つていた幼稚園を辞める事となつた。差別、区別、弱者…：このような言葉で頭の中がいっぱいになり、悔しかった。

新しく通い始めた幼稚園は「インクルーシブ保育」に取り組んでいる。障害の有無や国籍、年齢などの違いに関わらず、すべての子供が分け隔てなく同じ環境で共に育ち、学び合う保育の形だ。多様な人々が共生する社会の実現に向けた取り組みでもあると園長先生が言つていたそうだ。弟に居場所ができた。

彼は出来ないことばかりではない。数字、文字、地図や記号を一瞬で覚える能力や、絶対音感の持ち主だ。出来る事と出来ない事のアンバランスさも自閉症のひとつの特徴だ。新しく入つた幼稚園は苦手な事ややりたくない事を無理やりさせるのではなく、出来る事、好きな事、能力を最大限に活かし、伸ばしてくれたい。耳で聞いた情報は入りにくい弟に対して、目で見たものを記憶する能力を活かし、一日のスケジュールを文字化し見通しをたて、不安をなくしてくれた。身体に障害がある子、知的や精神的な障害を持つ子、そうでない子が皆同じ立場で平等に、それぞれを認め合い、当たり前前に生活してい

た。

インクルーシブとは、「全てを包んでいる」という意味だ。多様性社会と言われる世の中だが、「普通」と呼ばれる人間が様々な場面で障害を持つ人たちへレットテルを貼り、知識もないのにあらゆる事を決めつけていると感ずる。僕は弟と出会えた事により、一人一人の個性を尊重し合いながら生きる事がどれだけ素晴らしく尊いものかを学んだ。これからも学び続け、レットテルを貼られている人たちを支えられる人間になりたい。「障害」という言葉も、当たり前前の型に押し込めようとするから「障害」になるのであつて、彼らをきちんと理解し尊重するならば、それはその人たちならではの文化を持つているのにすぎないのではないかと感ずる。彼らにとつて、僕は「普通じゃない」のだから…。

見えない壁に阻まれ苦しんでいる人がたくさんいる。互いの理解を深め、その壁を取っ払い、真のインクルーシブな社会を、未来を背負う僕たちが作り上げていかねばならない。

「普通」って何だろう。

これからもこの問いの答えを求め続ける。

|  |
|--|
| <p style="text-align: center;">奨<br/>励<br/>賞</p> |
|--|

## 理解すること、関わること

八丈町立大賀郷中学校 三年

佐藤花

私の通う中学校には、特別支援学級の「桃桜組」がある。私のクラスの生徒と桃桜組の生徒は、ほとんどの授業を別々に受けているが、宿泊行事などは同じ学年全員で行う。その中でも修学旅行での経験は、私に「社会をより良くするために大切なこと」を考えるきっかけを与えてくれた。

三年生になって間もない頃、私たちは修学旅行で大阪万博を訪れた。見学当日、桃桜組の生徒二人を含む二つの班に分かれて自由に回っていたとき、ある出来事が起こった。見学がほぼ終わり、集合場所に戻る時間になった頃、桃桜組の女の子が先生とはぐれて見つからなくなってしまうのだ。担当の先生が少し目を離れた間に、どこかへ行ってしまったらしい。先生から事情を聞いた瞬間、頭の中が真っ白になった。そばにいた友達も同じだったと思う。その子は障がいを持っており、意思

疎通が難しいため、どこへ行ってしまうか予想がしづらい。しかも、大阪万博の会場はとても広い上に大勢の人であふれかえっていたため、もしその子がパニックになってしまったら、取り返しつかないことになるかもしれない——そう考えた私は、不安で胸がいっぱいになった。先生が連絡を取り合う中、私たちは合流した他の班の生徒たちと協力しながら必死で探した。幸い、迷子の放送が流される前に、その女の子は自分で集合場所に戻って来てくれたため、最悪の事態を免れ、みんなが安堵の表情を浮かべたのだった。私はそのときのことを、今でも鮮明に覚えている。

特に印象に残っているのは、女の子が戻ってきたときの学校の先生と生徒たちの反応だ。誰一人、その子を責める人はいなかった。むしろ、大勢が声を上げて喜び、遠くに行かず自力で帰ってきたことをほめる声も聞こえてきた。当時の私は無事に見つかってほっとした気持ちでいっぱい、その光景を深く考える余裕はなかったが、今振り返ってみると思う。「なんて素晴らしい状況だったのだろう」と。もし、迷子になったのが私だったら、勝手に先生から離れたことを注意されていたかもしれない。しかし、あのようになことがなかったのは、その場にいた全員が、女の子のこと、そして女の子が持っている障がいのことを理解していたからだ。これ

は、障がいについての理解を広める取り組みが多く行われている現代社会においても、あたりまえのことではないのではないだろうか。

私はこの経験を通して、「お互いに理解し合う」ということは、様々な人が快適に過ごせる社会を目指すために欠かせないことだと思ふようになった。そして、相手を理解するために最も大切なことは、「関わること」だと考えている。

私の中学校では、桃桜組の生徒たちと関わる機会が多く設けられている。宿泊行事もその一つだ。他にも、学期末には学年全員で楽しめるようなレクリエーションを行うし、休み時間にはお互いのクラスを訪れて遊んだり、会話を楽しんだりする。そして、何より私の中学校ならではの思う取り組みが「交流部」だ。この部活の目標は「楽しく交流すること」だけ。活動時間は短いですが、多くの生徒が所属し、学年やクラスの垣根を越えて交流を深めている。

私も一年生のときから交流部に所属している。今ではどのクラスの人とも自然に話せるようになったが、入部したばかりの頃は桃桜組の子たちへの接し方がわからず、戸惑ってしまうことが良くあった。しかし、活動していくうちに、それは無くなっていった。それは、実際に関わり続ける中で、その子たちの好きなことや得意な

こと、苦手なことなどを知り、相手の立場で考えられるようになったからだ、修学旅行での出来事も、私だけではなく、多くの人が桃桜組と関わりを持っていたからこそ、あの温かい空気が生まれたのだと思う。

現代では、障がいについて知ろうとするとき、SNSやインターネットを利用すれば簡単に情報が得られる。しかし、その中には誤った情報も含まれており、安易に信じてしまうことで偏見や誤解をうむ危険がある。すぐに調べられる画面上の知識だけで相手のことを決めつけてしまうと、相手は理解されないことに苦しみ、自分は相手の行動を理解できないまま、自分勝手に怒ったり悲しんだりする。そうして、結局はお互いに傷つくことになり、誰も幸せにならない。

そうならないために、そして障がいを持つ人もそうでない人も、同じように正しく理解され、快適に過ごせる社会を目指すために、「実際に関わり、理解しようとする姿勢」を忘れずに生きていこうと強く思う。この姿勢こそが、人権を守り合う社会への第一歩になると、私は信じている。

## 奨励賞

### 言葉の力と甲子園

小笠原村立小笠原中学校 一年

宇野 滲なみ

私は野球観戦が好きだ。テレビの前で手に汗をにぎり、応援の声が思わず出てしまう。第一〇七回全国高校野球選手権大会（以下「甲子園」）では、今年の夏の気温以上に熱い試合がたくさんあった。そのなかでも、決勝戦の沖繩尚学と日大三高の試合は圧巻だった。両チームが優勝を目指し、最後まで全力で戦う姿は、見るだけで胸が熱くなった。スポーツは、人の気持ちをひとつにする力がある。私はそう信じている。

しかし、この夏の甲子園では、広陵高校が二回戦の出場を辞退する出来事があった。理由として、野球部内での暴力問題。それを背景にした野球部員、その他の生徒、学校関係者への第三者によるSNSでの誹謗中傷、脅迫などの書き込み。このような出来事から、広陵高校は人命を守ることを最優先と考え、甲子園出場辞退に踏み切ったと言われている。

私はこのニュースを知り、二つの面から人権について考えた。一つは、暴力やいじめそのものが重大な人権侵害であるということ。もう一つは、事件をきっかけに起きたネット上の中傷もまた、人の人権を深く傷つける行為だということだ。

まず、暴力やいじめについて。冗談のつもりでも、「指導」だと言いついても、相手の体や心を傷つける行為は決して許されないことである。けがなど目に見える傷だけでなく、恐怖や不安といった心の傷は長く残る。人として大切にされるべき気持ち、それを「人権」というが、その人権が踏みこじられてしまうのだ。

次に、SNSでの誹謗中傷の問題である。スマホで文字を打つのは簡単。送る側は数秒で投稿できるが、受け取る側はその言葉を何日も引きずることがある。匿名性や拡散の速さ、「みんなが言っているから」という空気が、責任の意識を薄くしてしまうのではないか。事実かどうかを確かめないままの断定や、面白半分の拡散が続くと、当事者の名誉や安全までおびやかされる。画面の向こうには、私たちと同じように悩み、笑い、努力している『誰か』がいる。この当たり前を、私は忘れてはいけないと思う。

私は、言葉の重さを自分の体験からも知っている。ある日、友だちからのメールに「最低」とだけ書かれてい

た。たった二文字なのに、私は胸の中がぎゅっと冷たくなるのを感じた。対面なら表情や声の調子で気持ちがいしは分かるかもしれないが、文字だけだと「本気で怒っているのかな」「私はダメな人間なのかな」と悪い方に考えてしまう。送る側は短い時間で打った言葉でも、受け取った私は何日も気にして、夜に思い出しては眠れなくなった。あのととき私は、「言葉って、目に見えないけれどこんなにも重いんだ」と痛感した。

こうした出来事から、私は三つの約束を自分に課した。一つ目は、暴力もいじめも絶対にしないし、見たら見過ごさないこと。からかいの延長でも、相手がつらそうなら「やめようよ」と言ってみる。小さな「やめよう」が、場の空気を変えることがあると信じている。二つ目は、SNS等で人を傷つける言葉を書かない・広げないこと。怒りや悔しさでいっぱいするときほど、すぐに送信せず、深呼吸をして「これを言われたら自分はどう感じるか」と自分に問う。迷ったら送らない、と自分に言い聞かせる。三つ目は、応援や意見の伝え方を選ぶこと。プレーを批評するときは行動と事実にと絞り、人格をおとしめる言い方はしない。「ここが良かった」などと相手が前を向ける言葉を選びたい。

また、家族でニュースやSNSの話題を共有し、「これは事実かな?」「この言い方はどう思う?」と話し合

う。家族と考えを交換することで、感情に流されずに判断する力が少しずつ身についていく。

私が野球を好きなのは、プレーの中に仲間を思う気持ちがあふれているからだ。エラーをした仲間にすぐ「ドンマイ!」と声をかけるチーム。ベンチで全力で声を出し、出番が来たら迷いなく走る控え選手。そうした姿を見るたびに、私も明日をがんばろうと思える。だから顧客である私たちも、人を支える言葉を選んで使いたい。

言葉には力がある。元気をわけてくれる力もあれば、心を冷やしてしまう力もある。暴力やいじめは、体と心を同時に傷つける大きなまちがいだ。SNSでの中傷は、見えない場所で人の心を弱らせる恐ろしい行為だ。だから私は、あのメールの「最低」を、繰り返し返さない。

甲子園は、ただ勝ち負けを決めるだけの場所ではない。多くの人の努力と夢が集まる大舞台だ。そこにふさわしいのは、暴力でも中傷でもなく、だれかを支え、応援する言葉だ。

私は心ない声をかけられ傷つく人をなくしたい。その想いを胸に、今日も言葉の力に気をつけて過ごしたい。

## 奨励賞

### 障害者の偏見

町田市立山崎中学校 一年

小川玲那

私は、母が通っている薬局に車椅子の薬剤師さんがいることを聞きました。去年の秋ぐらいから、薬局の改装工事が始まり、レジなどのカウンターが低くなり、どうしてかなと思ったそうです。そして、今年に入り車椅子の薬剤師さんが接客していて、そういうことかと母は思ったそうです。私も実際に母についていった時に車椅子の薬剤師さんが働いているのを見ました。最初に見たとき、私は少し驚きました。薬局の仕事は立って働き回ることが多いと思ひ込んでいたからです。「車椅子で大丈夫なのだろうか」と心の中で感じたのを今でも覚えています。しかし、その薬剤師さんは、私の想像とはまったく違っていました。カウンターの奥で、パソコンに向かって処方箋を確認し、薬を準備している姿は、とてもときばきとしていて他のスタッフ、いや、それ以上に自信に溢れていました。その姿を見て私は自分の中にある

思い込みに気づかされました。それに加えて車椅子が通りやすいように幅が広くなり、接客するカウンターも車椅子に合わせた高さになり、車椅子の人でも働きやすいレイアウトになっていて、障害を持った人に合わせて、働ける環境を作っているその会社は、とても素晴らしいことだと思いました。ある日、母が薬をもらいに薬局に行った時、車椅子の薬剤師さんが母の前に来て、優しく話しかけてくれたそうです。母はその笑顔や話し方に、車椅子であることよりもその人柄や仕事ぶりの方が強く印象に残ったそうです。しかし、バリアフリー化は建物だけの話ではありません。私の心にも「見えないバリア」があります。私は、最初この薬剤師さんは見たとき「大変そう」と思いました。でもそれは無意識のうちに、「障害があると仕事が難しい」という思い込みにとらわれていたからだと思ひます。でも、実際に接してみると、その考えは間違いだと分かりました。障害があるからといって仕事が難しいとは限らない。工夫や環境、周囲からの理解が整えば、誰もが自分自身の能力を十分に発揮できるということを、この薬剤師さんは自分の仕事を通して私に教えてくれました。また、この経験から私自身の態度も変わりました。例えば、街で車椅子の方や白杖を持った方を見かけたとき、「手伝いましょうか」と声をかけられるようになりました。以前は、声をかけ

る勇気が無かったのですが、薬局での出会いが私にその一歩を踏み出させてくれたのです。また、実際に私自身が経験したことがあります。それは、祖父が車椅子に乗るようになった時に、何回か後ろから押したことがあります。その時に段差などがあり、スムーズに通り返ることができなくて、母に手伝ってもらいました。自分では何でもない段差が高齢者や障害者の人たちにとっては、大変なことだと気づかされました。人権とは、誰もが平等に持っている権利です。しかし、現実には「あの人は何々だ」と決めつけたり、まだまだ日常生活の中でバリアフリーになっていないところがあったりと、十分に環境が整っていないところもたくさんあります。制度や建物の整備はとても大切ですが、それ以上に、一人ひとりが思いやりを持って相手に接することが誰にとっても暮らしやすい社会に繋がります。本当の意味でのバリアフリーが実現だと思っています。薬局で車椅子の薬剤師さんと出会い、車椅子の薬剤師さんに合わせた低めのカウンタ―や車椅子も通れる広い通路といった工夫を目にした私は、これからも日常の中で出来ることを探していきたいと思っています。そして、自分の中の思い込みを見直し、誰に対しても同じように接することを大切にしようとした気持ちに気づけるようになりたいです。人権作文にこの出来事を書こうと思ったのも、私が体験した「心のバ

リアフリー」を多くの人に知ってもらいたいからです。これからも、誰もが安心して暮らし、働ける社会の実現のために、自分ができることを一歩ずつ実行していきたいと思っています。



## 奨励賞

## ちがいのちにある大切なこと

町田市立鶴川中学校 三年

金田彩希

私は以前から、「みんなと同じでいることが安心」だと考えていました。まわりと合わせていけば目立つことではないし、間違えることも少ない。だから、自分と少しちがう考えや行動する人を見ると、どこか不安な気持ちになったり、「ちよつとこの子変わっているな。」と感じ、距離を置いたりしてしまうことがありました。

そんな私の考えを変えてくれたのは、小学四年のときにやって来た転校生の存在でした。第一印象は「静かな人」。自己紹介も短く、あまり目を合わそうとしない子でした。授業中もほとんど発言せず、給食はコロナ禍で黙食で喋ることもなかったもので、私は少し心配になりました。でも、どう声をかければいいのか分からずにいました。

ある日、昼休みに友達とアニメのはなしをしています。ときに、その転校生が持つてるキーホルダーがはなしていったアニメのキャラクターを持っていました。私は思わ

ず、「そのアニメのキャラクター好きなの？」と声をかけてしまいました。彼はおどろきながらも対応してくれました。「うん、かっこよくて好きなんだよね。」と答えてくれました。それが、私たちの最初の会話でした。

その日から、私は彼と少しずつ話すようになりました。アニメのはなしから始まり、好きな声優や、映画のおどろかされることばかりでした。彼は、とても大人しいけれど、物事を深く考えていて、自分の意見をしっかりと持っていました。ときどき、私が「みんなこう思っているよ」と言うと、「でも、こういう見方もあるんじゃないかな。」と別の角度から意見をくれました。

最初はとまどいましたが、次第にそのちがいが新鮮にも感じられるようになりました。

それまでの私は、いつも「みんなと同じ」であることに気にかけていました。自分の意見がみんなとちがっていたら、とても言いづらかったし、「空気をよむ」ことばかりを考えていました。でも彼とはなす中で、ちがいを怖がることではなく、「どうしてそう考えるのか」と相手にまずは興味を持つという大切なことに気づいたので

す。そんなある日、クラスでグループ発表することになりました。私は彼と同じ班になり、彼が「あまり自分の考

えをはなさないから、少しむずかしいし苦手。」と言っていたので、正直少し不安な気持ちでいっぱいでした。でも、準備のとき、彼はだれよりも熱心に資料を調べてくれて、それに分かりやすく、まとめてくれました。そして発表本番では、きんちようしながらも、自分の言葉で一生涯命にはなして、私はその姿を見て、「周りの人とちがうことは弱さではない。むしろ、ちがいがあ

るからこそ、みんな支え合うことができるんだ。」と強く思いました。

人にはそれぞれ、生まれ育った環境、または性格や考え、得意なこと、苦手なことがあります。私たち人間は、「多数派が正しい」と思いがちですが、本当に大切なのは、「正しいかどうか」よりも、「相手を理解する気持ち」なのではないかと思えます。

今、ニュースなどで、「いじめ」や「人種差別」といった言葉をよく目にします。肌の色や、国籍、障がい、性別など、「ちがいが」といった理由で苦しんでいる、という人が世界中に沢山います。

もしかしたら、私たちの身のまわりにも、差別や偏見があるのかもしれない、そう思ったとき、身近なところから、少しずつでも思いやりの心を持って行動すること、私たち一人ひとりが「ちがいは悪いことじゃない」と気づけば、きっと社会は少しずつあたたかくなり、優

しくなっていくはずですよ。

私はこれからも、自分とちがう人の声に耳をかたむけ、「そういう考えもあるんだね。」と優しく受けとめられる人でいたいと思います。

そう考える社会を、周りの人たちと一緒につくっていきたい。そのためには、まずは、自分自身の言動や行動を見直すことから始めたいと思います。



|  |
|--|
| <p style="text-align: center;">奨<br/>励<br/>賞</p> |
|--|

## 差別に負けない心

町田市立鶴川第二中学校 三年

渡邊 凛太郎

これは、僕の母が大人になって、おばあちゃんから伝えられた話だ。

僕の母が小さい頃、当時通っていた保育園にとっても仲の良い女の子がいた。お昼寝のときはいつも並んで布団を敷いて、お絵描きするときは同じ色を使って描いたりしたのだという。家族ぐるみで仲が良く、よくお互いの家を行き来していたそうだ。

母が小学校へ入学するぐらいのときに、その女の子の両親が、母たちが住む家にやって来た。その日は、家にはおばあちゃんしかいなくて、おばあちゃんは、「親だけでうちに遊びに来てくれたのかな」と思っていたらしい。女の子のお父さんまで遊びにくるのは珍しいなあと思つて、おしゃべりをしていたら、女の子の両親が突然、

「うちは二人とも部落の出身です。うちの子とずっと仲

良くしてもらっていましたが、本当にいいのですか」と頭を下げてきた。そのときのおばあちゃんは、部落というのがどういふものなのかを知らなかったそうだ。突然頭を下げられたことに驚いて、「こちらこそ、これからも変わらず仲良くしてください」と伝えるのが精一杯だった。

その日の夜、帰宅したおじいちゃんにこの出来事を伝えると、「あの地区に住んでいるから、もしかしてそうかなと思つていたけど、やっぱり部落だったのか」とおじいちゃんは言った。おばあちゃんはまた驚いた。

おじいちゃんとおばあちゃんは、その地域で生まれ育つたのではなかった。二人とも、若いときに就職で引越してきたのだそうだ。特におじいちゃんは、仕事でいろんな会社を回ることがあつて、そのときに、どの場所が部落と呼ばれているかを聞いてきたのだという。おじいちゃんも、最初は部落が何かを知らなかったけれど、何度も聞かされるうちに、どういうことがわかってきたそうだ。地図を見れば、差別的な扱いをされている地区がどこかわかるようになったらしい。

どうして今まで教えてくれなかったのか、とおばあちゃんが聞くと、おじいちゃんは、

「子ども同士が仲良くなるのに、部落かどうかは関係ないだろう。」

と言った。それを聞いておばあちゃんは、たしかにそう  
だと思ったそうだ。誰かと仲良くなるために、出身地は  
関係ない。母と女の子は、その後も、お互いの家が引つ  
越すまでずっと仲良く過ごしたのだという。

この話を聞くまで、僕は「人権」という言葉の意味が  
よくわからなかった。「人間が人間らしく生きる権利」  
といっても、人間らしく生きるなんて当たり前のこと  
じゃないか、と思っていた。

でも、この話を聞いて、僕が当たり前だと思っている  
ことは、他の人にとっては当たり前じゃないことなのか  
もしれないと思った。当たり前前と感ぜて生きている  
友達だった女の子の両親が、自分たちは部落ですと伝え  
ようと決めたときの気持ちを考えると、とてもつらいと  
思った。

おじいちゃんは、どの地域が部落かを知っていたけれ  
ど、おばあちゃんにも母にも一切教えることはなかった  
そうだ。母の友達の子も、自分の子どもと同じよう  
に、遊びに連れて行つた。知つていても、そんなものは  
関係ないという強い心が、おじいちゃんにはあつたのだ  
と思う。

僕は、人は誰でも、心のどこかに差別の意識を持つて  
いると思う。僕としては、そんな意識を持つのは、とて

も嫌なことだ。本当なら、差別の意識なんて自分の中に  
一ミリも持ちたくない。

けれど、自分の中には差別の意識がある、ということ  
を理解しておくことが大切なのではないだろうかと思  
う。そうすることで、差別の意識が強まりそうになつた  
とき、負けない自分でいられるのではないだろうか。自  
分の中に差別の意識があることを受け止めておくこと  
で、自分の行動が差別的ではないだろうかと振り返るこ  
とができるようになるのではと思う。

いつか僕も、おじいちゃんのように、そんなものは関  
係ないという強い心を持つてようになりたいと思つてい  
る。



## 奨励賞

## 見えない障害と生きる

町田市立堺中学校 二年

外所 莉紗

私には、発達障害を持った兄がいる。生まれたときからそばにいる兄は、私にとって何か特別な存在でもなく、当たり前前の存在である。現在大学生の兄は、幸い、理解ある友達や先生、そして家族のサポートもあり、これまで安心して学校生活を過ごしてきたが、学校や社会の中で、時に他の人と同じように扱われず、悔しい思いもたくさんしてきたと思う。

発達障害は、脳機能の発達に関係する障害であり、育て方のせいではない。近年、この障害は広く知られるようになったが、未だにその原因が家庭環境にあるかのような誤解は多く、それは本人だけでなく、家族をも苦しめる。さらに、発達障害は目には見えない、外見からはわかりにくい障害だ。だからこそ周りの人は兄に対して「なんでそんなこともできないの?」と思うことがあるのだろう。兄は、その特性に加え運動障害があり、運動

や動作がぎこちなく、不器用さが目立つので、日々の生活においても困難に感じる事が多くある。兄の手先の感覚は、私たちがゴム手袋や軍手を2枚重ねてつけた感覚に近いそうだ。頭では理解していても、思い通りに体を動かせず、状況にうまく対応できないということも少なくないが、困難の多くは努力や気合いで解決できるものではない。しかし世間には、兄のような人に対し、それを「普通じゃない」と決めつけてからかったり、真似して笑ったりする人がいる。私自身も、そういう場面を何度か見てきた。その度に、私は怒りと悲しきで胸がいっぱいになった。どうして他人を傷つけて笑い者にするのか。たまたま障害を持って生まれなかっただけで、あなたたちはそんなに偉いのか。そう感じずにはいられなかった。

障害は誰にでも起こり得る。事故や病気によって、突然自分が障害を持つ立場になることもある。だからこそ、障害を持つ人に対して差別的な態度をとること、また、理解しようとしないうちは、自分自身を傷つけることにも繋がるのではないか。障害を持つ人の多くは、自分なりのやり方で一生懸命に生きている。それでも社会や他人からの反応が、その人達にとっては不親切で、冷たく感じることも多い。実際に兄も、「それができるのに、これができるのはおかしい」とか「さぼっていい

る、やる気がないだけ」とか、心無いことを言われることもあった。発達障害は、得手不得手の差が大きいとよく言われるが、人間誰しも、得意なことや苦手なことがあるはずだ。にもかかわらず、それを理由に馬鹿にされたり遠ざけられたりするのには、明らかに間違っている。

一方、相手の感情を読み取ることが苦手な兄が、場の雰囲気を理解できず、周りから見たとときに「空気が読めない人」と感じられる行動をしてしまうこともあったと思う。そのような場合両親は、何がいけなかったのか根気よく言い聞かせたり、短く視覚的な情報も交えて伝えたり、状況に応じて教え方を工夫していた。兄が悲観的にならないのは、「障害だから仕方ない」と障害を言い訳にせず、自分が困っていることを説明し、協力を仰ぐと同時に、どうやったらできるようになるかを一緒に考え、兄が生きやすくなる環境を整えてくれる周囲の温かい心があったからだと思う。

本当に必要なことは、理解しようとする姿勢だ。そして、障害について正しい知識を持ち、目の前の人を一人の人間として見ることに、誰もが無意識に「できるはず」と決めつけていることに気付くことだ。世界には、誰一人同じ人間は存在しない。そうすることで、「普通」や「当たり前」という言葉に囚われずに、相手の立場に立って考えることができるようになる。私は、兄のよう

に障害を持つ人が、生きやすい社会になってほしいと思っている。そしてその人達が、自分らしく過ごせるような環境が広がってほしいと願っている。

将来、私は障害や病気の有無に関わらず、誰もが対等に接し合える社会をつくりたい。もちろん、このような社会をつくるのは簡単なことではない。だがその第一歩として、自分自身が無理解や偏見に流されず、正しい知識と思いやりをもって行動することを心がけていく。そうした一人ひとりの意識の変化が、きっと社会を動かす力になるだろう。



|  |
|--|
| <p style="text-align: center;">奨<br/>励<br/>賞</p> |
|--|

## 自分事として

八王子市立浅川中学校 二年

山<sup>やま</sup>本<sup>もと</sup>彩<sup>さ</sup>生<sup>き</sup>

小学校の時、私には一人の友達がいた。みどり（仮名）は絵がとても上手でよく笑う子だった。しかし、あの日を境にみどりは学校に来なくなってしまった。

その日は私もみどりも普段通り学校に来ていた。そして、授業を受け、給食を食べて、休み時間には友達と話したり、私はみどりが絵を描いているところを見に行ったりしていた。掃除もみどりとは掃除場所が違ったがいつも通り掃除をし、さようならをして、学校を終えた。次の日、みどりは学校に来なかった。私は風邪でも引いてしまったのかと思い、特に気にしていなかった。しかし、みどりは次の日もまた次の日も学校に来ることはなかった。私はさすがに大丈夫か心配になり友達に聞いてみた。そうしたら、あの日の掃除の時間、みどりは自分の笑い声を馬鹿にされたのだという。みどりの笑い声は悪魔の笑い声のようと言われたのだという。それを聞いて

た時私は悲しい、悔しい、情けない、苛立ち、色んな気持がぐちゃぐちゃに絡み合って言葉が出なかった。その時初めて私は、いじめというのとはこんなにも簡単に起こってしまうということがわかった。でも、私はその事実を知った後もどうすることもできなかった。みどりに声をかけることも寄り添うこともできなかった。おそらく私は頭の片隅で他人事と思っていたのだと思う。だから何もできなかったのだと思う。それから私は何もできなかったことが小さなモヤモヤとしてずっと残っていた。

半年ほどたち、私はみどりとクラスが別れてしまった。みどりはあの日からずっと学校に来ていない。みどりにはもう一つ事情ができたこともあり、学校で姿を見ることは全くなくなってしまった。しかし、一年ほどたった時私は放課後にみどりに偶然会ったのだ。みどりは私にあつたら笑顔で手を振ってくれた。しかし、前のような笑顔ではなかった。それから少しずつみどりに会うことが多くなった。いつも手を振るだけだったが私は嬉しかった。でも会うたびに私のモヤモヤはじんわりと蘇っていった。そんな日々を送り、私達は卒業し、中学生になった。

私はもうみどりと会うことはないのかと思ひモヤモヤはそのまま残っていた。しかし、私はあるお祭りで見ど

りと再会することができた。みどりは私を見つけた瞬間学校に来れなくなる前のような笑顔で手を振りながら話しかけてくれた。話を聞くと、今はリースクールに通っていて、仲の良い友達もできて充実しているそうだ。私はその瞬間自分の中にあつたモヤモヤが消えていき、すごく安心した気持ちになった。

「壊すことは一瞬、でもなおすには時間がかかる。」この言葉を私は親から聞いたことがある。一時間かけてドミノを立てている。でも途中で誰かが間違えたり、わざとやったりするとそのドミノは一瞬で倒れてしまう。もとに戻すにはもう一時間かかってしまう。しかし、その出来事を誰か一人が見ている、手伝ってくれたら、元通りにするのに一時間かかるところが三十分で終わるかもしれない。手伝ってくれる人が二人だったら、三人だったら、もっと多かつたら元通りになるまでにかかる時間は短くなるかもしれない。

私はこの話はいじめと同じだと思う。一人が長い時間をかけて一生懸命生きている、成長しているのに対して、誰かが悪意があるうとなかろうと思つたことを口にする、行動に起こす。その一瞬で一人の心を、人生を変えてしまうかもしれない。その人が大切にしてきたものをその言葉に、行動によって一瞬で壊してしまう。その人の心に空いた穴が、壊れてしまったものを治すにはと

ても長い時間がかかる。でも、もし誰かが見て、助けてくれて、「大丈夫？」と声をかけてくれて、寄り添ってくれたら、心に空いた穴を治す時間は少しだけ短くなるかもしれない。辛い気持ちも少しは和らぐかもしれない。みどりも新しい学校の友達によって心に空いた穴が塞がってきていると思う。

私はみどりが傷つけられたことを他人事と思い行動しなかつたことは本当に情けないことだと思い、とても反省している。もし自分がみどりと同じ立場だったらとても辛いと思う。私は自分が何もしなかつたことに対してとても後悔している。だから、私はこれからもう二度と同じことを繰り返さないために、自分の行動や発言で人を傷つけないかを考えながら過ごし、いじめが起きそうだったら、勇気を出して「やめなよ。」いじめが起きてしまったら傷つけられてしまった人に「大丈夫？」と声をかけ、寄り添っていきたいと思います。また、そういうことで、自分事として考えられる人になりたいと思います。

## 奨励賞

## 自慢の父

国分寺市立第四中学校 三年

綾香羽流

「羽流のお父さんは何の仕事してるの。」友達との会話の中で聞かれました。当時父は、無職でした。私は、恥ずかしさから嘘をつくことしかできませんでした。

父は、元々個人経営のパン屋で働いていました。しかし、私が小学校五年生の頃脳梗塞という病気にかかりました。父は病気を患ってから人格が急激に変化しました。いつも、優しくかった父とは異なり、よく怒ったり、泣いたり、騒いだりするようになりました。脳梗塞の後遺症が残っていたのです。脳梗塞の後遺症には様々な種類があります。その中で父は麻痺、言語障害、高次脳機能障害、精神障害、排尿・排便障害などが主に見られる症状です。これらの後遺症により、いつもの日常が奪われました。共に父は障害者になりました。私は障害者という言葉に偏見を持っていました。「障害者は一般の人とは違う。」「障害者は何にも出来ない。」「迷惑だ。」と

当時は思っていました。実際に父は、今まで以上に苦しんでました。感情のコントロールが上手くいかず急に怒ったり、家族と喋るのも精一杯でした。そんな中、父は障害者ということもあり、ヘルプマークを身に付けることになったのです。正直、私は父がヘルプマークを身に付けることに抵抗がありました。なぜなら障害者にも偏見があるのに自分の父まで皆に「自分は障害者です。」と晒されるのが恥ずかしかったからです。周りの人になんて思われるか分からない、馬鹿にされるのではないかと、そう思うと怖くてたまりません。当時父が無職だったことも障害者だと知られるのも恥ずかしくて、同時に怖くて友達には言うことが出来なかったです。障害者になった事が原因で父とは遊ぶことが減りました。しかし、そんな状況でも父は障害者の自身と戦っていたのです。父は新しい職業につくためにパソコンの勉強をしたり、漢字を一から覚え直したりたくさん努力していました。父を後ろで見ていることが出来なかった私は、新しい父との接し方が分からず父とぶつかることが多かったのです。父は自身のことと頭がいっぱいな私のこと、家族のことまで考えて行動してくれました。そんな父を見て私は、障害者をなめていた自分自身が恥ずかしくなりました。障害者だからにも出来ない訳ではないし、どんなに苦しくても目の前を向いて生きている。このこ

とに気が付いた時、私は父が誇らしくなりました。父は就職活動中何十、何百件もの会社に障害者という理由で断られてきました。それでも父は一切諦めずに頑張っていました。どんなに遠くても、足を運び面接に行き、断られるごとに次へと努力を重ねる父はとても格好良く、たくましい姿でした。父は就職した後も障害者として、見られることが沢山あったのです。例えば、仕事内容でパソコン内容は無理だと決めつけられ書類を運ぶ雑用を押しつけられる事や、どんなに優しい方でもやはりどこか壁を作られ距離を感じることもあるのです。仕事を始めた時は毎日苦しんでました。私たち家族に当たることもありましたし、急に叫ぶことも少なくなかったです。この時私は父と会話することが怖くなったりもしました。どうしたら普通に会話出来るのか、父とまた仲良く会話したいなど様々な事を考えていました。そんな時、私は第一に怒らせない事を考えました。家では休める空間を作ったり、父の好物を渡したりして機嫌を取っていました。そうすることで父と会話することが上手いようになってのです。父は仕事場所でも次第に上手いくようになります。父の笑顔も多く見れるようになります。

これらのことから、私の中の「障害者」への想いは大きく変化しました。障害者だからにも出来ない訳では

ないし、一般の人と変わらない一人の人間であること。障害者に対してこの二つの事をよく思うようになりました。障害者とは、一人一人が持つ個性のようなものだと解釈するようになったのです。

今でも友達に父のことをどう思われるか、すごく怖いのです。多分、皆さんに「私の父は障害者なんだ。」と言った所で「かわいそう。」などと、悲観的に捉える方が多いでしょう。現状、楽観的に捉える方は決して多くないでしょう。ですが、「父が障害者なんて、かわいそう。」「今まで辛かったよね。」などと思われたくないです。父は強くて、誇らしい自慢の父です。どんな言葉を突き付けられても、どんなに苦しくても、常に前を向いて頑張る格好良い父です。こんなにも努力家な父を、私は尊敬しています。だからこそ、「障害者」という言葉を耳にした時に悲観的ではなく楽観的に捉えてほしいと思います。

私の父は障害者になってからも、変わらない大切な家族です。自慢の父でもあります。これからも変わらません。どうかこの作文を読んだあなたには「障害者」という言葉に対しての固定概念や偏見を少しでもなくしてほしいと願っています。

|  |
|--|
| <p style="text-align: center;">奨<br/>励<br/>賞</p> |
|--|

## 声なき声を

国立市立国立第一中学校 二年

竹内 楓

「この後、市長や教育長と個別で話したい方は来てください。」

市役所の人の言葉に、私の緊張が高まった。「市長・教育長とお話しよう！国立市の教育をみんなで考える会」に参加した時のこと。もうすぐ終わるといふ頃にそんな呼びかけがあった。その会は、市内の小・中学生を対象に、自分の学校に関する要望や意見を伝えることができるという場だった。グループを通してではなく、私は一人で市長や教育長と話ができるタイムリングを待っていた。そしてついに、その機会がおとずれたのだ。

このイベントに参加した理由は、市内に引っ越してきたある知り合いの様子が気になったからだ。その子は海外にもルーツがあり日常でもほとんど外国語を使っていたそうだ。海外経験があるクラスメートが教科書やプリントの日本語の意味を教えることもあったという。

「もっと大人のサポートがあったらいいのに。」そう思い、この現状を誰かに知らせるため、市長や教育長と話せる場に緊張しつつも、行くことにした。

なぜその子のことが気になるのか。それはきっと私自身も同じ環境に置かれたことがあるからだろう。小学生の頃、親の仕事の都合で一年間アメリカの現地校に通っていた時期があった。私も全く英語が分からず、授業が大変だった。

ただ、私には言語面でサポートしてくださった先生がいた。その先生は、転校したための私のために丁寧に時間をとって、学校で使う基本的な英語を教えてくださいました。その時に他の生徒が習っている学習事項を簡単な英語で説明してくださいました。初めて海外の学校に入って不安でいっぱいな私だったが、今思えば、心の中で「この人を頼っていいんだ」と安心していただと思う。

私はこの思いを伝えなかったのですが、会の終了が告げられた時、勇気を出して市長と教育長のもとへ向かった。「海外にルーツがある知り合いのことで相談があるんです。」と私は話し始めた。

「その人は、日本の学校に転校してきて、困っているのではないかと思います。外部から言語支援をしてくださる方がたまに来て、個別で日本語のレッスンを受けてい

るようです。」

「でも、もう少し頻繁に日本語のサポートがあったら、その人も安心して、学校に来て授業を受けられるのではないかと思います。」

私が話している間、市長たちは私と目を合わせ真剣な表情で聞いてくださっていた。私はそれを見て、ためらわずに伝えることができてよかったなと思った。

その後夏休みに入り、小学生の頃に使っていた教科書類を整理していた時、社会のノートが出てきた。懐かしく振り返っていたところ、あるページが目にとまった。憲法の「国民の権利と義務」。その中に、「教育を受ける権利」が書かれてあった。「教育」という言葉で、私は市長たちに話したことが頭に浮かんだ。もしかして、私はあの時、この権利を言いたかったのではないだろうか。

気になって調べてみると、日本国憲法第二十六条第一項に、「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」と書いてあった。正にこれだ。私はその知り合いが言葉の壁があるというだけで、能力に応じた教育を受けられないと心配したのだ。

その子が本人に合った学校生活を送れるようにすること。それは、人が人らしく生きることを目指す姿の一

つだ。そして、その追及の先にあるのが人権だと思う。普段の生活の中で感じる違和感にも、実は大切な人権が関わっていると知ることができた。

現在、日本語指導が必要な生徒数は増えている。その中には、海外ルーツがあるという人も少なくない。私は、自分自身が過去に言葉のサポートを受けたという経験があり、「教育を受ける権利」のために何かできることはないかと考えて行動にうつした。

このように、周りのことを見過ごさず、自分でできることを探して一歩踏み出すことが大切だと思う。この気持ちがあったからこそ、私は直接市長や教育長に勇気をもって話しかけることができた。

大人に声を上げる子どもはたくさんいる。その中には、日常生活の中で感じる違和感や困難が込められていることがある。しかし、時にはそれらがとても小さく、届かないこともあるだろう。だから、将来私が子どもたちの話に耳を傾ける側になった時には、その小さな声にも気づき、そっと汲み取れる大人でありたい。

|  |
|--|
| <p style="text-align: center;">奨<br/>励<br/>賞</p> |
|--|

## 知る・学ぶことでほどける偏見の糸

武蔵野市立第二中学校 二年

岡 おか 本 もと 美 み 咲 さき

昨年の夏、私は家族とともに広島を訪れた。「広島といえは原爆」世界で唯一の被爆国である日本に、そのような印象をもった人が多くいる。私自身も教科書やテレビ、毎年8月になると放送される平和式典などでそのことをずっと知っていたはずだった。けれど、広島を訪れる前の私にとって原爆とは「昔の出来事」「日本の歴史のひとつ」でしかなかった。なんとなく、どこか遠いもののように感じていたのだ。だが、実際に原爆ドームを目の前にしたとき、私は言葉を失った。コンクリートの焼け焦げた壁、むき出しの鉄骨、静かに佇むその建物からは、語られなくても伝わってくる悲しみと怒りがあった。さらに、原爆資料館では被爆直後の街を再現した展示、原爆がもたらした人間の体への影響、被爆した子どももの服や遺品を見た。資料館をめぐるうちに、私は「知っていたはずのこと」が、どれほど表面的だったか

に気づいた。そこにあったのは「生きていた誰かの人生」だった。

原爆の被害は、一瞬にして何万人もの命を奪い、その後も生き残った人達に長くつらい日々を強いてきた。そして今も、そのことを語り続ける人がいる。その人達は、過去の苦しみを未来に伝えることで、人が人を傷つける社会を変えたいと願い、声をあげ続けてきた。それは、二度と同じことが起きてほしくないから。そして、過去の苦しみを未来に伝えることで、「人が人を傷つける社会」を変えたいと願っているからだ。ガイドさんの話の中で、私は被爆者が原爆によって命を失うだけでなく、その後も長く被爆者やその家族は「差別」や「偏見」と闘ってきたことを知った。「被爆者と結婚すると子どもに影響が出る」「原爆症だから働けないだろう」「近づいたらうつるかもしれない」それらは当時、原爆について知らされなかったことによる得体の知れない不安や偏見、思い込みによる差別だ。そんな言葉が何十年もの間、被爆者やその家族を苦しめてきたという。体の痛みや病気に加え、周囲の目や社会の冷たさが、彼らの心にさらに深い傷を残したのだ。ある番組では「死ななかつたことを、なぜ責められるのか。」と語られていた。私はその言葉が忘れられない。

広島から帰ってきたあと、私は原爆に関する本を何冊

も読むようになった。被爆体験を語ったもの、小説として書かれたもの、実際にあった出来事をもとにしたドキュメンタリーなど様々なジャンルの作品を通じて、私はようやく、あの出来事を「自分の中」に引き寄せて考えられるようになった。そして、ふと思った。今の私たちの生活の中にも、同じような差別や偏見はないだろうか？被爆者に向けられた「見えない不安」や「根拠のない思い込み」は現代にもあふれている気がした。例えば、転校生に対して「前の学校で何か問題があったのか」と勝手に想像したり、外見が私と違うクラスメイトに対して「日本語話せるの？」と聞いてしまったり。病気で休みがちな人に「ずる休みじゃないの？」と裏でささやいたり。相手の背景や事情を知ろうとせず、その人の「イメージ」だけで判断してしまう。そういう心の動きは誰にでも起こるものかもしれない。私自身、こうしたことを「言葉にしたことはないから大丈夫」と思っていた。でも本当は、頭の中で勝手にイメージを決めていたことがあった。しかしそれが「偏見」や「差別」のはじまりなのだ。

差別は、誰か特別な人がするものではない。私たち一人一人の中にある小さな思い込みや無知が、気付かないうちに人の心を傷つけてしまう。それが「人権を侵害する」ということだと思う。平和は、ただ祈るだけでは守

れない。それと同じく人権も、当たり前のようにあるものではない。平和を守るために声を挙げ続けること、人権を守るために考え続けることが大事なのだと思う。だからこそ私たちは、過去の出来事を「歴史」として覚えるだけでなく、そこから学び自分事として捉え、今をどう生きるかを考えなければならぬ。まだ、今の私にできることは小さいかもしれない。しかし、まず「知ろうとすること」そして相手の気持ちを「想像しようとする」ということなら、今すぐにでも始められる。根拠のない不安や、自分と違う誰かを怖がるのではなく、「わからないからこそ、知って理解しよう」とすること。その小さな勇気が、差別や偏見をなくす一歩になり、また、「人権を大切にしよう」ということだと私は思う。これからも、自分の中にある思い込みや偏見に気付き、それをなくす努力をしていきたい。人の立場に立つて考え、違いを大切にできる人になりたいと思う。

## 奨励賞

## 私の特性と人権

にしみたか学園三鷹市立第二中学校

(非公表)

誰にでも得意なことで苦手なことがあると思います  
が、私自身もそうです。できないことや苦手なことで傷  
つくこともあります。クラスメイトに悪口を言われて悲  
しい思いをしたこともあります。

嫌なことがあると、私は頭の中でその嫌なことが何度  
も繰り返し再生されます。しかも、停止ボタンを押せま  
せん。つまり、ちよつとした嫌な事が積もり積もって、  
とても悲しい気持ちになってしまふのです。

実は、私は漢字をほとんど書くことができません。頭  
の中で漢字を作り上げることができないのです。モニ  
ターに書きたい漢字を大きく拡大して、それをゆつくり  
見ながら書き写すことはできませんが、自分で漢字を練習  
して手を動かして書いてみると、なぜだか書けません。  
練習すればするほど、複数の漢字が混ざってしまいま  
す。

定期試験では漢字を書くことができません。さらに英  
語の試験でも単語のスペルは合っているのに、隙間が空  
いているという理由で減点され、劣等感をおぼえていま  
す。

どうやら私は文字の見え方が多くの人達と違っている  
らしいのです。

それから、授業に集中し続けることがとても難しいで  
す。小学生の時はお尻がムズムズして座っていられませ  
んでした。そこで両親や学校の先生や、外部の病院の先  
生達とたくさん話をして、いくつかの検査もして小学校  
の通級に通えることになりました。小学校の通級に通う  
条件は、学校の授業に遅れがないことと、私自身が通級  
に通いたいという意思があることだと聞きました。この  
通級では、たくさんのかたを学びました。私が苦手な縄  
跳び、友達とのコミュニケーション、そして嫌な気持ち  
になったときの切り替え方を学びました。

中学生になった今は、自分の感情が抑えられない時、  
感情の爆発をどう発散するか、それから忘れ物が多いの  
でどうやったか思い出せるか、なども学び中です。

とはいえ、私には得意なことあつて、楽しんでやっ  
ていることもあります。ゲームをプログラミングして、  
遊んでもらうことが好きです。本を読むのも得意です。  
水の中が好きなので泳ぐこともできるし、虫は苦手だけ

ど、焚き火も得意です。犬は小さい頃怖い思いをしたので苦手ですが、猫は大好きです。

得意なことや苦手なこと、好きなことも含めて、私が自分らしくしあわせに生きていく権利がある、と知りました。それが人権なんだそうです。

そこで改めて、新国語辞典で「人権」を調べてみると、人間が生まれた時から持っている、生命、自由、平等などが保障される権利、と書いてありました。

さらに私の住む三鷹市の条例には

一、誰かを仲間外れにしたりいじめたりしない  
二、他の人が嫌がることをしない

三、友達が秘密にしていることを勝手に他の人に言わない

四、友達が秘密にしていることを無理矢理言わせようとしない

五、自分自身の秘密や悩みを打ち明けたいと思つてる友達がいたら、聞いてあげよう

六、けがをさせたり、心を傷つけるようなことをしない

い  
というのがあります。

【人権を尊重するまち三鷹条例 第四条 権利侵害等の禁止より】

みんなが安心して暮らせる場所は、人権が守られてい

る場所だと思えます。苦手なことや傷ついた気持ちを、みんながわかってくれたら、自分ももつと生きやすい気がします。

みんながそれぞれ違っていいし、苦手なこともある。でも、その違いをお互いに認めあうことが大切なのだと思います。

私は、この世界がみんなが楽しく安全に過ごせる場所になつてほしいと思います。

私も苦手なことや気持ちをちゃんと伝えて、みんなが理解してくれたらいいなと思います。

そして、私はみんなに優しくしてもらつたり助けてもらうことが多いので、私も、人に対して優しくしていければ、居心地の良い住みやすい世界になるんじゃないかな、と思います。



## 奨励賞

## 水族館が教えてくれたこと

鷹南学園三鷹市立第五中学校 一年

臧 佳 純

先日、私は家族と一緒に水族館へ出かけました。大きな水槽の中を悠々と泳ぐ魚たちを眺めていると、普段の生活では味わえない不思議な世界に引きこまれていくような感覚になりました。色とりどりの魚たちが光を反射させながら泳ぐ姿はとても美しく、時間を忘れて見入ってしまいました。けれど、そのとき耳にした周りの人の声が、私に人権という少し重たいテーマを考えさせるきっかけになりました。

私が立ち止まっていた水槽には、小さくて丸っこい魚が泳いでいました。見ためはずんぐりむっくりしていて、動きもどこかぎこちなく、私がかわいいなと思わず笑顔になりました。すると近くにいた小さな子供が「この魚、かわいいー」と元気に叫びました。その一方で、すぐそばにいた別の人は「なんか気持ち悪い。変な形だね」と口にしました。同じ魚を見ているのに、感想は正

反対だったのです。その後も似たような場面は何度もありました。私はそれを見ているうちに、魚たちの姿を通して人間の世界のことを考え始めました。

魚に対する感想が人によって違うのと同じように、人間同士も見ためや性格、話し方などに対してさまざまな感じ方をします。ある人を明るく素敵だと感じる人もいれば、うるさいと感じる人もいます。背の高さや肌の色障害の有無、国籍の違いなどもまた人によって個性や魅力に見えたり、逆に違和感や苦手意識につながったりします。私はふとこんな想像をしました。もし水族館の中に同じ種類の魚しかいなかったらどうだろう。きっと最初は珍しさに喜んで、すぐに退屈してしまうでしょう。大小様々な魚が泳ぎ回り、形や色が異なるからこそ、あの空間は生き生きと輝いて見えるのです。人間社会も同じではないでしょうか。違う人がいて、違う考え方がいるからこそ、互いに学び合い、社会が豊かになっていきます。ちがいは弱さでも欠点でもなく、むしろ社会を支える大切な力だと気づきました。

しかし、現実にはその「感じ方がい」を理由にして相手を傷つけたり、排除したりすることは少なくありません。

私も学校でこんな経験をしたことがあります。ある授業中の時、先生が出した問いかけに対して、クラスのみ

んなが意見を言い合いました。多くの人が「Aがいい」と答える中で、ある友達が勇気を出して「私はBの方が良いと思います」と発言しました。私は「なるほど、そういう考え方もあるんだ」と思いましたが、教室の一部からクスクスと笑い声が聞こえてきました。友達の顔が一瞬曇り、すぐにうつむいてしまいました。その様子を見た私は、クラスで多様な意があるからこそ話し合いが深まるはずなのに、自分と異なる意見を面白がつて笑ってしまうことなど、その態度や一言がどれほど相手を傷つけることかを痛感しました。

また、国際社会でも同じことが起きています。二〇二五年八月にオーストラリアのシドニーで、「ジミーズ・ファラフェル」というレストランが、アラブ系の伝統的なスカーフ、ケフィーヤを身につけていた客に対して入店を拒否したというニュースがありました。店側は「他のお客さんが不快に思う可能性がある」という理由を挙げましたが、この対応は差別ではないかと大きな議論を呼びました。同じケフィーヤを見ても、ある人にとっては自分の文化の誇りを示す大切な衣服ですが、別の人にとっては政治的な主張や対立を連想させるものと感じられてしまうことがあります。この「感じ方のちがい」が、相手を理解しようとする姿勢を欠いたときに、差別や排除に直結してしまうのです。相手の文化の

表現を頭から否定するのではなく、その背景にある思いを理解しようとする姿勢が大切だと思います。

今回は水族館で魚を見て、かわいいと思った人と気持ち悪いと思った人。その小さな違いが、私に大きな学びを与えてくれました。この体験を通して、私は「人権は日常に深く関係している」ということを強く感じました。学校や社会での人間関係も、水族館の魚たちのように多様であればあるほど豊かになります。その一方で、違いを受け入れる心がなければ、お互いに生きにくい世界になってしまいます。私はこれからも自分と違うものと出会った時に、おかしいと決めつけるのではなく、面白い・新しいと前向きに捉えられる人でありたいと思います。そして、自分の言葉や態度が誰かを傷つけていないかを意識しながら過ごしていきたいです。人権を守るというのは、そんな小さな思いやりの積み重ねから始まるのではないのでしょうか。

## 奨励賞

## 「人権保育」について

調布市立第三中学校 二年

黒沼稟

「人権」と聞いて私は、去年の夏休み数日保育園でのボランティアをしたことを思い出した。四歳児クラスの給食の時の出来事だった。A君が味噌汁の中にご飯を入れて食べていた。それを見たB君が、

「A君、ご飯を入れて食べちゃいけないだよ。」と注意したのだ。近くにいたのが私しかいなかったので、対応に困っていた。何故なら食事のマナーを伝えた方がいいのかなと迷ったからだ。A君は、

「なんでいけないんだよ。」と言い返ししばらく言い争いは続いた。先生が近寄り、B君に対して、

「どうしてお味噌汁にご飯を入れて食べたらいけないの？」と話した。私は、A君を注意するかと思っただが、B君に対しての問いに少し驚いた。B君は、

「うちではママに味噌汁に入れて食べてはいけないって言われたんだよ。だからA君もいけないんだよ。」と反

論した。先生は、

「B君は味噌汁に入れてはいけないって思う気持ちがあったんだよ。でもA君の気持ちは入れて食べたいっていう気持ちがあるんだよ。それぞれ違うんだよ。」と話していた。A君は少し困惑していたが、気持ちは落ち着き、A君もB君も好きな食べ方で食べ始めた。私はこのことについてとても関心があったので、後で先生に質問してみた。私もマナー面のことやA君と同じ考えだったと正直に話した。先生は、子どもにもそれぞれ気持ちがあって、一人ひとり尊重しなくてはいけないこと。それが人の権利であり、子どもも大人も障がい者も外国人も同じという話をしてくれた。小さな日常的な関わりの中で、子どもの権利を保証することが重要であり、それが私たちの役目だと教えてくれた。色々考えさせられたボランティアだった。今回のテーマが「人権」だったので、一年前の私がとても印象的だった。保育園での人権、すなわち「人権保育」についてインターネットで調べることにした。

乳幼児期の子どもの人権とは、子どもたちが自分を尊重され、差別や虐待から守られること、そして遊びや学び、自己決定ができる権利を持つことである。乳幼児期に人権教育がなぜ重要なのかという理由は三つある。一つ目は、乳幼児期は、人間形成の基礎が作られる時期で

あり、人権の尊重の精神を育むことが極めて重要である。二つ目は、身近な大人との信頼関係が、豊かな人間関係の土台を築く。三つ目は、保育でも人権尊重の実践は、子どもが自分自身と周りの個性や存在を尊重する力を養う。この理由を見た時、自分の保育園時代のことを思い出した。甘えん坊だった私は、保育園の登園時にどうしても母親と離れたくなかった。「ママ、行かないで」と抱っこを求め泣いていると、担任の先生が「ママの抱っこ嬉しいよね。」と私の気持ちを受け止め、しばらく先生が近くにいて寄り添ってくれた。気持ちが落ち着いてから、私の好きな塗り絵やおままごとなど好きな遊びに誘ってくれたり、「お友達が待っているよ。」と声を掛けてくれ、私の気持ちを切り替えられるようにしてくれた。担任の先生は、毎日優しく受け入れてくれたおかげで私は泣かずに保育園で登園できるようになった。この日常的な場面であるが、保育者が子どもの気持ちに日々寄り添ってたり、安心感を与える声掛けによって、少しずつ信頼関係が生まれ、人間関係の土台を作ってくれたのだと思う。また、年長組の時には、クラス全員で自分の好きなことや友達の好きなところを言い合う機会があった。その時は、何も考えずに「私は絵を描くことが好きで、〇〇ちゃんは走るのが速いからいいな。」と話した記憶がある。このことも、今回調べてみると、自

分や友達の良い所を見つけることで、自己肯定感や自尊心が高まり、自分や友達の個性を受け入れ、大切にすることが向上すると書いてあった。そのような保育を行うと、子ども同士を大切に、片付けなどの時に友達の手助けを自主的に行うようになるようだ。

このように、日常の中に人権という難しい言葉や考え方をどう伝えるのか、教育していくのかと興味を持って調べたが、ボランティアの時の先生の指導のように難しく考える必要はなく、保育者や保護者の方が、子どもを大切な存在として接する中で自然と育まれていくと学んだ。私も身近な小さな子どもたちには優しく接していき、将来保育士という職業を選んだ時や母親になった時に、子どもの権利をしっかり考えられるような大人になりたいと思った。人権保育について詳しく学ぶことによってこれから私が人生に役立つ学びが得られて良かったと感じた。



## 奨励賞

### 祖母と私と人権

東久留米市立東中学校 三年

南野みなみの陽はる

私たちは毎日を過ごす中で「人権」という言葉を耳にすることがあります。授業や道徳の時間で学ぶ機会もありますが、正直、私は「人権」と聞いても、それがどんなものなのか、どのように自分と関係しているのかを深く考えることはありませんでした。しかし、祖母が車椅子で生活していた経験や、学校生活での学びを通して、「人権」は特別なことではなく、私たちのすぐそばにあるもののだと実感するようになりました。

私の祖母は、病気の影響で歩けなくなり、車椅子を使って生活していました。初めて一緒に外出したとき、私は想像以上に大変さを感じました。祖母の家の近くは道は段差が多く、車椅子を押すとき「ここは通れるかな」と不安になりました。特に階段や急な坂があると、私一人ではどうしても動かすことができず、祖母を待たせてしまう場面もありました。そのとき、私は「祖母は

普段からこんな不便な生活をしているんだ」と気づき、なんとも言えない気持ちになりました。しかし、駅や公共施設は祖母の家の近くの環境とは全然違いました。スロープやエレベーターが整備されていて、祖母と一緒に安心して出かけることができました。

ある日、祖母と一緒に近所の駅から電車に乗って、ご飯を食べに行きました。駅員さんに手伝ってもらったり、スロープを使ったりしてお店まで行くことができました。一緒にご飯を食べている時の祖母の顔を見て私はとても嬉しくなりました。施設の設定や周りの人の協力がなければ、一緒にお店に来ることは出来ず、このような楽しい時間を過ごすことは出来なかつたでしょう。こうして、祖母の人権、つまり「自由に生活できる権利」が守られているのだと強く感じました。

この経験を通して私は、人権は特別なものではなく、身近な生活の中で守られるべきものだと気づきました。祖母にとつてはバリアフリーの環境が人権を守る大切な条件でしたが、他の人にとつてはまた違う形で必要な支えがあると思います。たとえば、安心して勉強できる環境や、安全に遊べる場所、意見を言える場なども、すべて人権に関わっています。

私は中学生として学校に通っていますが、そこでも人権が守られていることを感じます。授業料が無料で、毎

年新しい教科書が配られ、図書館や体育館、グラウンドといった施設を自由に使えるように使っています。しかし、これらが整っていなかったら、勉強することすら難しくなるかもしれません。部活動で体育館やグラウンドを使えることも、とても素晴らしいことです。部活動は、同学年、他学年と交流でき、仲を深められる貴重な環境です。仲間と切磋琢磨しながら成長し、そこでできた経験と思い出は将来大切な宝物になるでしょう。こうした環境があるのは、すべて「学ぶ権利」が大切にされているからなのだと気づきました。

祖母の車椅子生活で得た経験と自分の学校生活を重ねて考えると、人権は「特別な人のためのもの」ではなく、「全ての人に平等にあるもの」だと分かります。そして、人権が守られるためには、周りの環境や制度だけでなく、私たち一人ひとりの思いやりや行動も大切だと思います。もし祖母を助けてくれた駅員さんがいなかったら、祖母の外出は不安なものになっていたかもしれない。環境と人の気持ち、その両方がそろって初めて人権は守られているのだと思います。

これから私は大人になり、やがて社会に出て働くようになります。そのときには様々な税金を納める立場になり、社会を支える一員になります。税金で整えられたバリアフリーの設備や、学校の施設に支えられてきたから

こそ、自分の負担が誰かの暮らしや人権を守ることにつながるのだと思うことができます。祖母の笑顔や、学校での学びを思い出しながら、私も誰かの人権を守るように頑張りたいです。

人権は決して「自分とは別世界の出来事」という訳ではなく、私たちの身近にあるものです。祖母と過ごした時間や、学校生活での経験で、私はそれを知ることができました。これからも、一人ひとりの人権が大切にされる社会であるように、私もできることを考え、行動していきたいです。そして、誰もが笑顔で暮らせる未来をつくっていきたいと思います。



## 奨励賞

## 身近にあつて気づかないもの

府中市立府中第一中学校 二年

村田 旭

「こんにちは。よろしく願います。」

そう挨拶をした私を、温かく迎えてくださった。その雰囲気がとても良くて、私の緊張は一気にほぐれた。

一学期に私は老人ホームで職業体験をすることになった。期間は三日間だ。最初に出した自分の希望とは異なる配属先に戸惑い、

「え？なんで？なんで老人ホーム？」という言葉が口をついて出ってしまった。

体験前日に班のみんなで職業体験先へあいさつに向かった。その途中で、僕はパスモを駅で落としてしまい、紛失した。そのため、約束の時間より大幅に遅刻をしてしまった。班のみんなにも迷惑かけ、何とかたどり着いた老人ホームには、私を心配してくださる優しい言葉があった。遅刻したことで叱られるのかと思っていた私は拍子抜けし、職員さんの言葉に嬉しく

なった。こんな優しい人がたくさんいる職場体験なら大丈夫かもしれない、とちよつと安どして帰った事を覚えている。

そうして迎えた職業体験初日。私にとっては初めてのことが沢山あった。利用者さんの事を考えて、誤えんを防ぐために麦茶にとろみをつけて提供すること。食事はそれぞれに合わせた献立やご飯の固さになっていること。ウォーカーで歩く時はその人のスピードに合わせること。すべてが利用者さんの一人一人に合った内容になっていた。私はそのことに気付いて、自分ができることを考えた。一緒に体操をしたり、食事の配膳を行ったり、目を合わせ、相手の表情をよく見ること。精一杯自分ができることすると、利用者さんから笑顔でお礼を言ってもらうことが出来た。

また、職員の方にもたくさん事を教えていただいた。その中で、私が何度も耳にした言葉は「寄り添う」という言葉だった。言葉にすると簡単だけれど、実際に行動してみると、それはとても大変で時間のかかるものだった。だけど、それによって利用者さんの笑顔が増えて温かい空気に包まれた三日間を過ごすことが出来た。そのことが嬉しくて、私にとって心地の良い時間だった。

職業体験の三日間は、当初思っていたとは異なり、

あつという間に過ぎてしまった。最後の日のお別れの挨拶をした時は、ちょっと寂しいと思っただくらいだった。利用者さんの笑顔を見ているうちに、いつの間にか私の方が皆さんに寄り添ってもらっていたのだと気付いた。人は人に寄り添ってもらうことが、こんなにも心強く、心地良いことなのかと改めて思った。

職業体験が終わった後、ニュースで高齢者の虐待や若い子への虐待を見て心が痛んだ。今まではニュースでそのような事を見聞きしても、どこか他人事だった。けれど、高齢者⇨職業体験で出会った老人ホームの方々、と想像すると苦しくなった。

人に寄り添う時、人間は想像する力も必要だと思う。もし〇〇さんだったら…もし自分だったら…こうしてもらうと嬉しいかな…こういうやり方がいいかな…と相手のことを思いやる、想像力こそが寄り添うことに必要なことだと私は気付いた。

私にも祖父母がいる。遠く離れて住んでいるのでなかなか会えないが、この夏も帰省して久しぶりに元気な顔が見ることができた。今年の帰省では、携帯を脇に置いてなるべく祖父母の顔をしっかりと見て話をたくさんした。職業体験で学んだ「寄り添う」ことを大切に、相手のことを想像して、祖父母との時間を過ごすことが出来た。

私はこれから何か行動を移す時に、この「想像力」を働かせることにしようと思っている。友達と話す時、ラインやメールを送る時、SNSに書き込む時、いったん立ち止まって想像をする。自分の言葉が相手にどのような伝わるのか、しっかりと想像するようにしようと思っている。SNSを見ると、私でも眉をひそめてしまうような内容を見かけてしまう。なぜこの言葉を流したかわからない時がある。私はそのようにはなりたくない。しっかりと想像力を持って、自分の言葉や行動には責任を持ちたいと思っている。相手の立場を想像できなくなったら、それは人に寄り添えなくなっている、と私は貴重な体験から学んだ。このことを忘れずに、人を支えられる人になりたいと思う。



## 奨励賞

## 自分らしく生きられる社会に

福生市立福生第一中学校 二年

原 島 咲 陽

私は四歳の頃に両親が離婚し、母と二人で暮らしてきました。いわゆる母子家庭です。卒園後、小学校入学前に引越し、新しい環境での生活が始まりました。母は月に二、三回夜勤の仕事をしていたため、小さい頃の私は、母が夜勤に行く日の夜がとても寂しく感じられました。布団に入ってもなかなか寝れず、「早く帰ってきて欲しい」と思いながら一人の時間を過ごしていたことを、今でも覚えています。

けれども、年月が経つにつれて、私は一人で過ごす時間を段々と楽しめるようになりました。テレビを見たり、絵を描いたり、自分の世界に没頭することで、母がいなくても寂しさを感じなくなっていたのです。今では、父がいない分、一人の時間が多く、正直、それが私にとってはお楽しみでありたいとも感じていません。金銭的に苦労したこともなく、母が一生懸命働いてくれるお

げで、不自由なく生活できています。

私の家庭の形は、世間でいう普通の家庭とは少し違いかもしれません。けれども、私はそれを不幸だとは思いません。むしろ、母子家庭だからこそ得られた気づきや強さがあると感じています。小さい頃は寂しい気持ちに耐えながらも、一人の時間を楽しむ工夫を覚え、自分なりの成長に繋げることができました。そして、「家庭の形は人それぞれで良い」と、自然に考えられるようになったのです。この考えは私にとって、今も心の支えになっています。

社会にはさまざまな家庭の形があります。両親と暮らしている人、祖父母と暮らしている人、里親に育てられている人、一人で暮らしている人など、どの家庭にもそれぞれの事情と違いがあります。しかし、一般的な家庭像と違うだけで偏見を持たれたり、心無い言葉をかけられたりする人も少なくありません。実際、私も小さい頃、行事の時などに「何でお父さん来てないの?」と聞かれた時、両親が離婚していることを言わなかったことがあります。その時は、自分も一般的な家庭像と違う人に偏見を持っていたこともあり、自分も偏見を持たれたくないと思っていました。

でも、本当に大切なのは家庭の形ではなく、「その家庭でどれだけ愛情や安心を感じられるか」だと今は思

ます。母は夜勤で忙しい中でも、私の話を聞いてくれたり、学校行事にできるだけ参加したりしてくれました。その母のおかげで、私は考え方を变えることができましたのだと思います。

この経験を通して、私は人権について考えてみました。人権とは誰もが平等に持っている大切な権利です。家庭の形や育った環境によって、人の価値が決まるわけではありません。けれども社会の中には「普通はこうあるべき」という固定観念があり、それが人を苦しめてしまうことがあります。私は自分が、自由に安心して過ごせるのは、家庭の形を否定されなかったからだと思います。だからこそ、どんな家庭の人も、自分の家庭を隠さなくてもいい社会にしたいと思います。

そのために、これからの社会では「家庭の多様性をもっと認め合うこと」が大切だと思います。学校でいろいろな家庭の形について話し合ったり、絵本や教材の中に父と母がいる家庭だけでなく、母子家庭や父子家庭、祖父母と暮らす家庭なども当たり前前に書かれるようになったりすれば、子供たちも自然と違いを受け入れられるのではないのでしょうか。そうすれば、偏見を持たれることも、特別扱いされることも減っていくと思います。

私はこれからも「家族の形は人それぞれで良い」と思う自分のままでいたいと思います。そして将来は、私の

ように母子家庭で育つ子供や、違った家庭の形の中で育つ子供が、周りの目を気にせずに自分の人生を歩めるような社会をつくりたいです。そのためには、まず自分が周りの人に対して偏見を持たず、相手を尊重できる人間でありたいと思っています。

人権を大切にする社会は、一人一人の思いやりから始まります。家庭の形などの違いを理由に誰かを特別視したり、否定したりするのではなく、その人自身を尊重することが大切です。私も母子家庭で育った経験を誇りにしながら相手を理解し、思いやりの心を持って接することのできる人になりたいと思います。そして、どんな人も「自分らしく生きられる」と感じれる社会を少しずつでも作っていききたいです。



## 奨励賞

## 兄の道

檜原村立檜原中学校 一年

青柳 幸

私の兄は不登校だ。私が小学校二年生の時、ある日突然学校に来なくなつた。その頃はよく状況が分からず、「またいつか戻つて来るだろう。」と思つていた。でも結局、戻つて来ることはなかつた。いつも兄と並んで歩いた通学路を一人で歩くことになつた。それは、自分が思うよりずっと寂しかった。

私は兄が大好きだつた。小学校一年生の頃、学校に行きたくなくて毎日のように泣いていた私のランドセルと手さげバックを持つてくれた。兄は算数が得意だつた。学校の宿題を兄に教わりながら二人でやる時間は、今でもはつきりと覚えていて。川遊びも地域のお囃子も、たくさんの事を兄の背中を見て覚えた。私にとって頼れる兄だつたし、憧れだつた。そんな兄は、私の自慢の存在であつた。

そんな兄が学校に行かなくなつてもう五年が経つた。

本当なら今も一緒に登下校していたはずだ。一緒に入ってたクラブや部活もあつた。本当なら、難しい勉強も教えてくれたと思う。兄の得意だつた数学は特にそうだろう。だから、昔の自分と兄のように、何気ない日常を過ごしている友達を見ると、少し羨ましく思つてしまふ自分がある。それと同時に、あの頃よく分からず、何もできなかった自分を悔しく思うのだ。

今の兄を見ていて思うことがある。「不登校」とは何だろう。ネットで調べても、その理由のほとんどが「いじめや人間関係のトラブル」や「家庭環境の問題」「心身の不調」などだ。兄もきつとそうだったのだろう。私の家の場合、家庭環境は良いと思うが、兄にとって辛い何かがあつたことは分かっている。でも思う。私もそうだ。きつと誰でもそうだ。「学校に行きたくない。」と思うことはたくさんある。兄のように学校に行かなくなつたらどれほどいいかと思うこともある。では、なぜ私は学校に来ているのだろうか。不登校になつてしまふ人とそうでない人、何が違うのだろうか。そう考えると、兄は少し変かもしれない。空気が読めないし、自分の好きなことに關しては、私が理解できない程のめり込む。逆に苦手なことは、とことんできない。それが「変なことではなく、個性なんだよ。」と教えてくれたのは母である。でも、個性だと分かっているにも、「学校に来ていない」

「他の人とは違う」というのがひっかかった。前は自慢に思っていた兄のことも、今はそう思えなくなってしまう。

そんな私の考えを変えたのは、地域の人達だ。学校に行っていない兄に「働くこと」や「頑張ること」がどういふことを教えてくれた。学校に行っていないくても、お店のボランティアや小さい頃から大好きなお囃子をやってる兄の姿はキラキラと輝いて見える。それを見ていると兄の個性が光っているように感じる。

「学ぶ」ということは学校に行くことが全てではない。私は、いろいろな学び方があっていいと思う。兄のように誰にだって個性がある。その一つ一つの個性が輝く学びを受けることが一番重要だと思う。

そして私は不登校の人だけでなく、その兄弟の人にも伝えたい。不登校という言葉に悪いイメージを持たないでほしい。不登校という言葉聞いてひきこもるなど暗いイメージを思い浮べる人もいるだろう。もちろん、そういう人もいる。でも前向きに、自分の道を見出している人もいる。誰にだって自分の個性が輝く場所がきっとある。その場所を見つければ簡単なことではないだろう。でも、探し続けてほしいと思う。そして、その場所

で自信を持って生きてほしい。  
また、私と同じように不登校の兄弟がいる人、私と同

じような思いをした人もきっといるだろう。不登校による問題は、その本人や周囲の環境に目が向けられがちだ。でも、辛いのは本人だけじゃない。私はいつかそんな人と出会ったら、力になりたいと思う。それと同時に、不登校という言葉への認識を変えて、誰もが、自信を持って生きられる社会になることを願っている。

兄と過ごすはずだった、たくさん時間は戻ることはない。でも、その寂しい気持ちや悔しい思いを胸に、私の道を進んでいく。



# 令和七年度 全国中学生人権作文コンテスト東京都大会入賞作品

## ◆最優秀賞（東京法務局長賞）

その人らしく

府中市立府中第三中学校

二年 川上和奏

## ◆最優秀賞（東京都人権擁護委員連合会会長賞）

勇気が生んだ「声」

昭島市立瑞雲中学校

二年 中村希愛

## ◆最優秀賞（東京新聞賞）

声をかけること、声をあげること

府中市立府中第一中学校

二年 皆木涼

## ◆特別優秀賞（東京都教育委員会賞）

「外国人お断り」って、なんで？

中央区立日本橋中学校

二年 宋子鋆

## ◆特別優秀賞（一般財団法人東京私立中学高等学校協会賞）

82億個の風船

学習院女子中等科

三年 藤井しおり

## ◆特別優秀賞（全日本空輸株式会社賞）

家族と暮らすのはあたり前じゃない

東大和市立第五中学校

二年 八代空希

## ◆特別優秀賞（日本航空株式会社賞）

妹が教えてくれたこと

府中市立府中第六中学校

一年 井上鉄心

## ◆特別優秀賞（日本空港ビルディング株式会社賞）

私の兄のこと。

練馬区立石神井中学校

二年 前川さや

## ◆優秀賞

偏見と不平等がない世の中へ

荒川区立第四中学校

二年 竹内柚希

◆ 奨励賞

知ってほしい自分のこと  
私がおぼにいる  
自分らしさを信じて  
私と、もう一人の「人間」

『いつかきつと…』  
いじめについて  
戦争と人権  
わたしたちの未来  
ささやかな決意  
見えない壁  
理解すること、関わること  
言葉の力と甲子園  
障害者の偏見  
ちがいの中にある大切なこと  
差別に負けない心  
見えない障害と生きる  
自分事として  
自慢の父  
声なき声を  
知る・学ぶことでほどける偏見の糸  
私の特性と人権  
水族館が教えてくれたこと  
「人権保育」について  
祖母と私と人権  
身近にあつて気づかないもの  
自分らしく生きられる社会に  
兄の道

日野市立日野第四中学校  
日野市立日野第四中学校  
西東京市立明保中学校  
東海大学菅生高等学校中等部

東京学芸大学附属竹早中学校  
品川区立浜川中学校  
大田区立大森第十中学校  
城西大学附属城西中学校  
葛飾区立本田中学校  
江戸川区立松江第六中学校  
八丈町立大賀郷中学校  
小笠原村立小笠原中学校  
町田市立山崎中学校  
町田市立鶴川中学校  
町田市立立鶴川第二中学校  
町田市立堺中学校  
八王子市立浅川中学校  
国分寺市立第四中学校  
国立市立国立第一中学校  
武蔵野市立第二中学校  
にしみたか学園三鷹市立第二中学校  
鷹南学園三鷹市立第五中学校  
調布市立第三中学校  
東久留米市立東中学校  
府中市立府中第一中学校  
福生市立福生第一中学校  
檜原村立檜原中学校

二年 萩生田 彩音  
二年 (非公表)  
一年 栗本 莉瑚  
三年 山崎 典

一年 白土 治子  
七年 芦澤 汰劍  
三年 川上 日奈多  
三年 高橋 さくら  
三年 ゾルジャルガルスベア  
三年 相川 紬  
三年 佐藤 花  
一年 宇野 玲  
一年 小川 滯  
三年 金子 希那  
三年 渡邊 凜太郎  
二年 外所 凛紗  
二年 山本 彩生  
二年 綾香 羽流  
二年 竹内 楓  
二年 岡本 美咲  
一年 (非公表)  
二年 臧佳 純  
二年 黒沼 稟  
三年 南野 陽  
二年 村田 陽  
二年 原島 咲  
二年 青柳 幸

◆ 作文委員会賞

火花の音と砲撃の記憶

|                    |               |    |       |     |
|--------------------|---------------|----|-------|-----|
| 「幸せのタネ」            | 千代田区立神田一橋中学校  | 二年 | 梁     | 若   |
| 言葉の違和感             | 中央区立晴海中学校     | 二年 | 神田    | 洋都  |
| 戦争のない社会へ           | 港区立港南中学校      | 三年 | 川崎    | 環   |
| 私にできること            | 新宿区立落合中学校     | 二年 | 下山    | 知志  |
| 勇気を出して相談できた、あの日。   | 上野学園中学校 (台東区) | 一年 | 石井    | 杏野実 |
| 一粒の種から未来に多くの花を     | 台東区立駒形中学校     | 三年 | 伊澤    | 美音  |
| 会話することで            | 桜丘中学校 (北区)    | 三年 | 佐藤    | せり花 |
| 知ってほしい、私のこと        | 北区立明桜中学校      | 二年 | 島本    | 結   |
| 生徒の権利              | 大田区立大森第十中学校   | 三年 | 森田    | 悠里  |
| 言葉の壁を越えるには         | 世田谷区立奥沢中学校    | 二年 | 大木    | 由佳  |
| みんなが共に生きやすい社会を目指して | 渋谷区立代々木中学校    | 二年 | 森     | 智輝  |
| 私の妹                | 渋谷区立原宿外苑中学校   | 一年 | 福元    | 和花  |
| 言葉に泣いて             | 渋谷区立原宿外苑中学校   | 三年 | (非公表) |     |
| 苦い思い出から考えたこと       | 渋谷区立広尾中学校     | 二年 | 田中    | 翠   |
| 偏見と事実              | 目黒区立第一中学校     | 二年 | 山内    | 咲良  |
| みんなのできる小さな一歩       | 中野区立北中野中学校    | 二年 | (非公表) |     |
| 知らないことによつて出来る壁     | 中野区立北中野中学校    | 二年 | 松平    | 茉央子 |
| 自分らしく              | 中野区立中野東中学校    | 二年 | 清水    | 紬生  |
| 人に対する思い            | 中野区立第五中学校     | 二年 | 古賀    | 雅希  |
|                    | 杉並区立井荻中学校     | 三年 | 近藤    | 凜人  |

|                     |                     |    |     |       |
|---------------------|---------------------|----|-----|-------|
| いじめは「終わらない」         | 杉並区立井草中学校           | 一年 | 岸   | 竜ノ輔   |
| 見ているだけだった自分         | 杉並区立富士見丘中学校         | 三年 | 中村  | さら紗   |
| 「違いを認める勇気           | 十文字中学校 (豊島区)        | 三年 | 五十嶺 | 紗那    |
| 人権の過去と未来            | 板橋区立板橋第一中学校         | 九年 | 金子  | 美月    |
| 「過去を刻み、未来を守る」       | 板橋区立志村第四中学校         | 七年 | 小林  | 純一郎   |
| 思いやりの花              | 東京家政大学附属女子中学校 (板橋区) | 二年 | 池田  | 麗加    |
| 小さな命から学んだこと         | 練馬区立石神井中学校          | 二年 | 山下  | ひらり   |
| ふたつのルーツ、ひとつの私       | 練馬区立開進第三中学校         | 二年 | 山   | ひらり   |
| インターネットにおける人権侵害を考える | 練馬区立開進第三中学校         | 二年 | ホラン | 茉莉花カン |
| 共に生きる社会とは           | 練馬区立開進第三中学校         | 二年 | 藤田  | 蓮     |
| 自分らしさは誰かの勇気になる      | 足立区立西新井中学校          | 二年 | 倉坪  | 真也    |
| あいこでしよ              | 墨田区立文花中学校           | 二年 | 土屋  | 愛瑠菜   |
| 知ることが第一歩            | 墨田区立桜堤中学校           | 二年 | 久保  | 結華    |
| 死ぬ権利                | 江東区立大島中学校           | 二年 | 江口  | 貴啓    |
| 傷つけたつもりではなかった       | 江戸川区立瑞江第三中学校        | 三年 | 佐藤  | 里紗    |
| ファンデーション            | 江戸川区立清新第一中学校        | 二年 | 榎本  | 龍     |
| ペナルティよりも大切なこと       | 大島町立第二中学校           | 三年 | 藤間  | ひなた   |
| 男女差別                | 新島村立新島中学校           | 二年 | 青沼  | 歩花    |
| 曾祖母から学んだこと          | 神津島村立神津中学校          | 二年 | 松本  | 虎偉    |
| 生きる権利               | 三宅村立三宅中学校           | 一年 | 長谷川 | 稜     |
|                     | 立川市立立川第一中学校         | 二年 | 三宅  | 里穂    |

入賞作品一覧

|                    |                 |       |         |
|--------------------|-----------------|-------|---------|
| 平和の尊さを未来へ          | 立川市立立川第七中学校     | 二年    | 加瀬光里    |
| 人権の尊重に必要なこと        | 立川市立立川第八中学校     | 二年    | 今村 牙    |
| 見過ごされる外国人労働者の人権    | 昭島市立清泉中学校       | 二年    | 藤原彩圭    |
| 「安心して暮らす社会」をつくるために | 東大和市立第三中学校      | 二年    | 寺田 栄子   |
| 自分を大切に、他者を尊重する社会へ  | 東大和市立第四中学校      | 二年    | 原 島 颯 大 |
| 「当たり前」             | 武蔵村山市立小中一貫校村山学園 | 二年    | 内 藤 さら  |
| 言葉の力               | 武蔵村山市立第三中学校     | 八年    | 三 井 帆七海 |
| ひと言の重み             | 八王子市立ひよどり山中学校   | 一年    | 近 藤 友 恵 |
| ボールがつかないだ絆         | 八王子市立第五中学校      | 一年    | 坪 内 太 完 |
| 思いやりの心             | 八王子市立石川中学校      | 二年    | (非公表)   |
| スポーツと人権            | 八王子市立元八王子中学校    | 二年    | (非公表)   |
| 感染者への差別は無知から来るもの   | 八王子市立横山中学校      | 二年    | 鳥 澤 遥 音 |
| 相手に対する理解           | 日野市立七生中学校       | 三年    | 今 井 志 歩 |
| 面会交流と僕の気持ち         | 日野市立三沢中学校       | 一年    | 四 家 晃   |
| 外国人との交流に必要なこと      | 町田市立小山中学校       | 二年    | 浅 井 陽 希 |
| ちがいを認め合える社会へ       | 稲城市立稲城第一中学校     | 二年    | 市 原 楓   |
| 人権侵害と僕             | 稲城市立稲城第一中学校     | 二年    | 村 田 哲   |
| 心のバリアフリーとは         | 多摩市立東愛宕中学校      | 一年    | 井 上 瑛 斗 |
| 体操の先生が教えてくれたこと     | (非公表)           | (非公表) | (非公表)   |
| 言葉の重み              | 多摩市立聖ヶ丘中学校      | 二年    | 中 陽 菜 多 |

|                     |                  |    |            |
|---------------------|------------------|----|------------|
| 自分らしく生きる            | 府中市立府中第三中学校      | 二年 | 西 田 樹 央    |
| 障害がある弟と共に           | 府中市立府中第五中学校      | 二年 | 中 野 夢 愛 美  |
| 曾祖母から学んだこと          | 小金井市立小金井第一中学校    | 三年 | 梨 原 春 歌    |
| いじめ                 | 小金井市立緑中学校        | 三年 | (非公表)      |
| 見えない壁               | 国分寺市立第二中学校       | 三年 | (非公表)      |
| 「誰か」のことじゃない。        | 国立市立国立第二中学校      | 二年 | (非公表)      |
| 自分と向きあう             | おおさわ学園三鷹市立第七中学校  | 二年 | 野 上 裕 禾    |
| 小さな勇氣               | 調布市立調布中学校        | 二年 | 野 上 美 乃 里  |
| 匿名の闇                | 明治大学付属明治中学校(調布市) | 三年 | 福 原 心 菜    |
| 身近なプライバシー侵害について     | 明治大学付属明治中学校(調布市) | 三年 | 大 場 美 桜    |
| 苦境に立たされた移民          | 狛江市立狛江第二中学校      | 二年 | マカール ネヒバット |
| みんなが大切にされる世界        | 小平市立小平第一中学校      | 三年 | (非公表)      |
| 障害のある人と共に生きる社会を目指して | 小平市立小平第二中学校      | 二年 | 前 沢 彩 桜    |
| 無意識の偏見              | 小平市立小平第三中学校      | 一年 | (非公表)      |
| 外国人差別から考える人権問題      | 小平市立小平第六中学校      | 三年 | 田 中 凜 佳    |
| ハンセン病患者への思い         | 東村山市立東村山第一中学校    | 一年 | 登 藤 凜 子    |
| 優しさの原動力             | 東村山市立東村山第四中学校    | 二年 | 石 見 結 希    |
| 繋がる想い               | 東村山市立東村山第五中学校    | 二年 | 山 田 桔 子    |
| 自分らしさを大切に           | 清瀬市立清瀬第三中学校      | 二年 | 高 橋 凜 乃    |
| 私は何者？               | 東久留米市立南中学校       | 二年 | 鈴 木 杏 実 南  |

入賞作品一覧

|                    |              |       |       |     |
|--------------------|--------------|-------|-------|-----|
| 見えない壁をこえて          | 東久留米市立東中学校   | 三年    | 浦田    | こ   |
| みんなと違っていいじゃないか     | 西東京市立田無第一中学校 | (非公表) |       |     |
| 取り戻せないもの           | 西東京市立田無第二中学校 | 二年    | 新井    | ひなの |
| 多様性                | 西東京市立田無第二中学校 | 二年    | (非公表) |     |
| クラスメイトと万博が教えてくれたこと | 青梅市立第二中学校    | 一年    | 市川    | 万哩  |
| 『助ける勇気、助けない選択』     | 青梅市立第三中学校    | 一年    | 木田    | 優心  |
| ルッキズムは悪か           | 奥多摩町立奥多摩中学校  | 三年    | 杉村    | 錦   |
| 「家族」という見えない罰       | 羽村市立羽村第二中学校  | 二年    | 伊藤    | 真宗  |
| 違いを超えて             | 羽村市立羽村第二中学校  | 三年    | (非公表) |     |
| 支え合い               | 瑞穂町立瑞穂中学校    | 三年    | 井口    | 紗菜  |
| 自分らしさ              | あきる野市立西中学校   | 一年    | 石井    | 紗朱  |
| 忘れられない夏の学び         | あきる野市立秋多中学校  | 三年    | 井上    | 日芽禾 |
| 小さな助け合いでありがとうが生まれる | 日の出町立大久野中学校  | 一年    | 清水    | 柑名  |

※作者の希望により、一部非公表とされている箇所があります。

# ◆応募校一覧（順不同）

千代田区立神田一橋中学校  
 中央区立銀座中学校  
 中央区立佃中学校  
 中央区立晴海中学校  
 中央区立日本橋中学校  
 中央区立晴海西中学校  
 港区立港南中学校  
 新宿区立牛込第一中学校  
 新宿区立落合中学校  
 新宿区立落合第二中学校  
 新宿区立西新宿中学校  
 新宿区立西戸山中学校  
 学習院女子中等科  
 新宿区立四谷中学校  
 台東区立御徒町台東中学校  
 台東区立柏葉中学校  
 台東区立桜橋中学校  
 台東区立駒形中学校  
 上野学園中学校  
 文京区立第六中学校  
 北区立稲付中学校  
 北区立滝野川紅葉中学校  
 北区立明桜中学校  
 北区立田端中学校  
 桜丘中学校  
 荒川区立第四中学校  
 品川区立浜川中学校  
 品川区立富士見台中中学校  
 品川区立荏原第六中学校  
 品川区立糎谷中学校  
 大田区立大森第十中学校  
 世田谷区立富士中学校  
 世田谷区立奥沢中学校  
 渋谷区立広尾中学校  
 渋谷区立鉢山中学校

渋谷区立立上原中学校  
 渋谷区立代々木中学校  
 渋谷区立原宿外苑中学校  
 渋谷区立笹塚中学校  
 渋谷区立松濤中学校  
 渋谷区立渋谷本町学園中学校  
 東京都立第一中学校  
 目黒区立第十中学校  
 目黒区立第一中学校  
 目黒区立第二中学校  
 目黒区立北野中学校  
 目黒区立緑野中学校  
 中野区立立中野中学校  
 中野区立明和中学校  
 中野区立立中野東中学校  
 中野区立立中野南中学校  
 中野区立立第七中学校  
 中野区立第五中学校  
 東京都立富士高等学校附属中学校  
 杉並区立阿佐ヶ谷中学校  
 杉並区立松溪中学校  
 杉並区立天沼中学校  
 杉並区立井草中学校  
 杉並区立井荻中学校  
 杉並区立富士見丘中学校  
 杉並区立松ノ木中学校  
 豊島区立駒込中学校  
 豊島区立池袋中学校  
 豊島区立池袋中学校  
 十文字中学校  
 城西大学附属城西中学校  
 板橋区立板橋第一中学校  
 板橋区立桜川中学校  
 板橋区立西台中学校

日本大学豊山女子中学校  
 東京家政大学附属女子中学校  
 練馬区立開進第二中学校  
 練馬区立開進第三中学校  
 練馬区立石神井中学校  
 練馬区立大泉西中学校  
 足立区立花畑中学校  
 足立区立蒲原中学校  
 足立区立西新井中学校  
 墨田区立吾嬬第二中学校  
 墨田区立文化中学校  
 墨田区立桜堤中学校  
 江東区立有明中学校  
 江東区立大島中学校  
 葛飾区立本田中学校  
 江戸川区立立松江第六中学校  
 江戸川区立清新第一中学校  
 江戸川区立小岩第一中学校  
 江戸川区立瑞江第三中学校  
 大島町立第一中学校  
 大島町立第二中学校  
 大島町立第三中学校  
 大島町立富士中学校  
 八丈町立大賀郷中学校  
 八丈町立三原中学校  
 新島村立新島中学校  
 新島村立式根島学園式根島中学校  
 神津島村立神津中学校  
 三宅村立三宅中学校  
 小笠原村立小笠原中学校  
 小笠原村立母島小中学校  
 立川市立立川第一中学校  
 立川市立立川第二中学校  
 立川市立立川第三中学校  
 立川市立立川第四中学校

立川市立立川第五中学校  
 立川市立立川第六中学校  
 立川市立立川第七中学校  
 立川市立立川第八中学校  
 立川市立立川第九中学校  
 昭島市立福島中学校  
 昭島市立瑞雲中学校  
 昭島市立清泉中学校  
 昭島市立拜島中学校  
 昭島市立多摩辺中学校  
 啓明学園中学校  
 東大和市立第一中学校  
 東大和市立第二中学校  
 東大和市立第三中学校  
 東大和市立第四中学校  
 東大和市立第五中学校  
 武蔵村山市立小中一貫校  
 武蔵村山市立第三中学校  
 武蔵村山市立小中一貫校  
 武蔵村山市立第五中学校  
 大南学園第四中学校  
 武蔵村山市立第一貫校  
 八王子市立第一中学校  
 八王子市立第四中学校  
 八王子市立第五中学校  
 八王子市立第七中学校  
 八王子市立第八中学校  
 八王子市立第九中学校  
 八王子市立立元八王子中学校  
 八王子市立立ひより山中学校  
 八王子市立立甲中学校  
 八王子市立立石川中学校  
 八王子市立立横山中学校  
 八王子市立立横山中学校  
 八王子市立立恩方中学校  
 八王子市立立柗田中学校

応募校一覧

八王子市立加任中学校  
 八王子市立浅川中学校  
 八王子市立みなみ野中学校  
 八王子市立松が谷中学校  
 八王子市立横川中学校  
 八王子市立高尾山学園中学校  
 八王子市立別所中学校  
 日野市立日野第一中学校  
 日野市立日野第二中学校  
 日野市立日野第三中学校  
 日野市立日野第四中学校  
 日野市立三沢中学校  
 日野市立平山中学校  
 日野市立大坂上中学校  
 日野市立七生中学校  
 町田市立町田第一中学校  
 町田市立町田第二中学校  
 町田市立町田第三中学校  
 町田市立南中学校  
 町田市立成瀬台中学校  
 町田市立鶴川中学校  
 町田市立鶴川第二中学校  
 町田市立薬師中学校  
 町田市立金井中学校  
 町田市立忠生中学校  
 町田市立小山中学校  
 町田市立小山田中学校  
 町田市立堺中学校  
 町田市立山崎中学校  
 稲城市立稲城第一中学校  
 稲城市立稲城第二中学校  
 稲城市立稲城第三中学校  
 稲城市立稲城第四中学校  
 稲城市立稲城第五中学校  
 稲城市立稲城第六中学校

駒沢学園女子中学校  
 多摩市立東愛宕中学校  
 多摩市立和田中学校  
 多摩市立諏訪中学校  
 多摩市立聖ヶ丘中学校  
 多摩市立鶴牧中学校  
 多摩市立多摩永山中学校  
 多摩市立落合中学校  
 多摩市立青陵中学校  
 多摩市立多摩中学校  
 府中市立府中第一中学校  
 府中市立府中第二中学校  
 府中市立府中第三中学校  
 府中市立府中第四中学校  
 府中市立府中第五中学校  
 府中市立府中第六中学校  
 府中市立府中第七中学校  
 府中市立府中第八中学校  
 府中市立府中第九中学校  
 府中市立府中第十中学校  
 府中市立浅間中学校  
 小金井市立小金井第一中学校  
 小金井市立東中学校  
 小金井市立緑中学校  
 小金井市立南中学校  
 国分寺市立第一中学校  
 国分寺市立第二中学校  
 国分寺市立第三中学校  
 国分寺市立第四中学校  
 国分寺市立第五中学校  
 国立市立国立第一中学校  
 国立市立国立第二中学校  
 国立市立国立第三中学校  
 武蔵野市第一中学校  
 武蔵野市第二中学校  
 連雀学園三鷹市立第一中学校  
 にしみたか学園三鷹市立第一中学校

三鷹の森学園三鷹市立第三中学校  
 三鷹中央学園三鷹市立第四中学校  
 鷹南学園三鷹市立第五中学校  
 東三鷹学園三鷹市立第六中学校  
 おおさわ学園三鷹市立第七中学校  
 調布市立調布中学校  
 調布市立神代中学校  
 調布市立第三中学校  
 調布市立第四中学校  
 調布市立第五中学校  
 調布市立第六中学校  
 調布市立第七中学校  
 調布市立第八中学校  
 明治大学付属明治中学校  
 晃華学園中学校  
 狛江市立狛江第二中学校  
 小平市立小平第二中学校  
 小平市立小平第三中学校  
 小平市立小平第四中学校  
 小平市立小平第五中学校  
 小平市立小平第六中学校  
 小平市立花小金井南中学校  
 創価中学校  
 白梅学園清修中学校  
 東村山市立東村山第一中学校  
 東村山市立東村山第二中学校  
 東村山市立東村山第三中学校  
 東村山市立東村山第四中学校  
 東村山市立東村山第五中学校  
 東村山市立東村山第六中学校  
 東村山市立東村山第七中学校  
 日本体育大学桜華中学校  
 清瀬市立清瀬第三中学校  
 東久留米市立久留米中学校  
 東久留米市立東中学校

東久留米市立西中学校  
 東久留米市立南中学校  
 東久留米市立大門中学校  
 東久留米市立下里中学校  
 東久留米市立中央中学校  
 西東京市立保谷中学校  
 西東京市立田無第一中学校  
 西東京市立田無第二中学校  
 西東京市立田無第三中学校  
 西東京市立田無第四中学校  
 西東京市立柳沢中学校  
 西東京市立田無第五中学校  
 西東京市立明保中学校  
 青梅市立第一中学校  
 青梅市立第二中学校  
 青梅市立第三中学校  
 青梅市立第六中学校  
 奥多摩町立奥多摩中学校  
 羽村市立羽村第一中学校  
 羽村市立羽村第二中学校  
 羽村市立羽村第三中学校  
 瑞穂町立瑞穂中学校  
 瑞穂町立瑞穂第二中学校  
 福生市立福生第一中学校  
 福生市立福生第二中学校  
 福生市立福生第三中学校  
 あきる野市立西中学校  
 あきる野市立増戸中学校  
 あきる野市立御堂中学校  
 あきる野市立第五中学校  
 東海大学菅生高等学校中等部  
 檜原市立檜原中学校  
 日の出町立大久野中学校  
 日の出町立平井中学校  
 御協力に感謝申し上げます。

令和7年度  
全国中学生人権作文コンテスト東京都大会審査員

|                              |       |
|------------------------------|-------|
| 東京新聞編集局経済部生活班編集委員            | 鈴木久美子 |
| 東京都教育庁指導部主任指導主事              | 小野 憲明 |
| 一般財団法人東京私立中学高等学校協会広報部副部長     | 加藤 晃孝 |
| 東京都人権擁護委員連合会会長               | 草薙 一郎 |
| 東京都人権擁護委員連合会副会長              | 宮本 道子 |
| 東京都人権擁護委員連合会こども人権委員会委員長      | 野尻 信江 |
| 東京都人権擁護委員連合会男女共同参画社会推進委員会委員長 | 森井 良子 |
| 東京法務局人権擁護部長                  | 佐久間和美 |
| 東京都人権擁護委員連合会人権作文実行委員会委員長     | 小此木 始 |

(敬称略)

無断転載を禁じます

※本作品集の作文を他の刊行物に掲載する場合には、原則、許可が必要となりますので、下記に御連絡ください。

〒160-0004  
東京都新宿区四谷 1-6-1 四谷タワー 13階  
東京法務局人権擁護部  
TEL. 0570 (011) 000

令和8年1月 発行

発行者 東京法務局人権擁護部  
東京都人権擁護委員連合会  
東京都新宿区四谷 1-6-1 四谷タワー 13階  
TEL 0570 (011) 000